

吉林大学
Jilin University

成均館大学校
Sungkyunkwan University

岡山大学
Okayama University



岡山大学キャンパス・アジア 第2期事業総括成果報告書

CAMPUS Asia Final Report 2016-2020 Okayama University

CAMPUS Asia



岡山大学キャンパス・アジア 第2期事業総括成果報告書

CAMPUS Asia Final Report 2016-2020 Okayama University

CAMPUSAsia

平成28年度採択 文部科学省 大学の世界展開力強化事業 アジア諸国等との大学間交流の枠組み強化
岡山大学「東アジア高等教育圏を見据えた中核的高度実践人＝アジアクラット育成プログラム」

目次

1 はじめに	3
2 プログラムの目的と実績概要	4
1)プログラムの目的	4
2)養成する人材像	5
3)質保証を伴った教育システム	7
4)実績概要	17
5)学生交流実績	18
3 特色あるプログラム	20
1)語学・文化交流プログラム	
① 吉林大学夏期派遣プログラム	20
② 成均館大学校夏期派遣プログラム	24
③ 成均館大学校冬期受入プログラム	26
2)専門教育プログラム	
① 人文・社会学系(吉林大学)派遣プログラム	28
② 自然科学系(吉林大学)派遣・受入プログラム	32
③ 自然科学系(成均館大学校)派遣・受入プログラム	35
④ 先端医療応用コース(医学系)受入プログラム	38
⑤ 先端医療応用コース(薬学系)派遣・受入プログラム	40
3)東アジア・リーダーシップ論・学生フォーラム	43
4)三大学共同教育	46
4 今後の展望	56



1 | はじめに

日中韓において教育の質の保証を伴う大学間教育・研究交流を促進し、東アジア地域全体を視野に入れた人材育成をめざすとともに、東アジア共同体の実現に貢献するという理念のもとでキャンパス・アジアプログラムはスタートしました。2011年度～2015年度のパイロット・プログラムで大きな成果をあげ、岡山大学・吉林大学・成均館大学校の日中韓3大学コンソーシアムは第2期キャンパス・アジアに採択されました。第2期キャンパス・アジアプログラムが今年度をもって終了します。第1期を振り返ると、広く日中韓の3か国交流プログラムを大学内外に浸透させるため、魅力的な交換留学プログラムや体験型研修プログラムの開発を全学的に推進し、世界展開力を養成する基盤を形成しました。この成果を受けて、第2期では「東アジア高等教育圏を見据えた中核的高度実践人＝アジアクラット育成プログラム」をキーワードとして、東アジアの発展に資する専門的知識・能力を備えた実践力のある人材を育成し、3大学が東アジアの次世代を担う中核的専門職業人の育成拠点となるよう教養から専門知識を持った高等教育を提供することを目指して活動を展開してきました。第1期パイロット・プログラムから引き継いだ中間評価で高い評価を受ける一方で、語学力の質的保証といった課題も指摘されました。高い語学力を示しつつ、アジアクラットとなる専門人材の養成を強力に推進していくことが求められています。2019年度は67名を受入れ、62名を派遣するという実績を積み重ねることができ、ダブル・ディグリーの大学院生は共同指導を受けながら岡山大学で研究をしています。加えて、人文・社会学系においても、ダブル・ディグリー学生の受入れ体制が整備され、キャンパス・アジアプログラムは目的に向かって順調に歩みを進めていました。第2期終了後の更なる発展(第3モード)を目指して、2019年末に成均館大学校が当番校となり、3大学コンソーシアム会議を韓国ソウルで開催しました。岡山大学が得意とする“持続的開発目標SDGsへの貢献”を活動の中心に据え、ASEAN諸国の大学と連携しながらプログラムを深化・拡張するとの認識を共有し、第3モードを意識した第2期最終年である2020年の活動に入ることで合意しました。しかし、2019年末に一部地域で報告された新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が瞬く間に全世界に拡大し、WHOがパンデミック宣言を発出するに至りました。世界各国が感染防止対策として防疫措置を強化し、それまでのような国境を跨いだ自由な人の往来が極めて難しくなっていました。また、感染防止対策として対面での交流も困難となり、計画していた多くの交流活動を停止せざるを得ませんでした。しかし、3大学コンソーシアムオンライン会議で議論を重ね、コロナ禍でもキャンパス・アジアプログラムの歩みを止めない方針を再確認し、対面に代わる新しい交流の形としてリモート技術を利用したオンラインセミナーやシンポジウムを積極的に実施することでプログラムを継続しています。最近では、COVID-19やSDGsをテーマとした3大学共同セミナーなどを開催しています。交流活動の具体的な内容は各章をご覧ください。

最後になりますが、第2期キャンパス・アジアで頂いた皆様のご協力に感謝申し上げます。日中韓の3大学が連携しながら、これまでに獲得した成果を更なる高みに引き上げるべく、パンデミックのような状況が起きても活動ができるような第3モードの準備に入ります。

今後のキャンパス・アジア事業にもご協力をお願いいたします。

岡山大学副学長(国際担当)
グローバル人材育成院長
大学院環境生命科学研究科 教授
木村邦生

2 | プログラムの目的と概要

1) プログラムの目的

2015年度に終了した「キャンパス・アジア」パイロット事業では、「共通善」をキーワードとした東アジア型グローバル教養教育システムの構築、パートナー校との協働経験の蓄積および連帯・相互信頼の形成、単位互換、成績評価制度の確立、人文・社会学系・医歯薬学系ダブル・ディグリー協定の締結と実施、多言語・多文化教育の実施、600人近くの高いモビリティなどを実現してきた。第2期キャンパス・アジア事業では、これらの基礎に立って、引き続き高い学生のモビリティを実現するとともに、教育の質の保証を強化する観点から、専門教育分野における交流の強化、学位を伴った教育の深化を通じて、次世代中核的専門職業人(アジアクラット)を育成する。

中華人民共和国の吉林大学、大韓民国の成均館大学校と岡山大学の3大学は、コンソーシアム間の協定をさらに整備し、互換性の高いアジア高等教育制度を構築する。具体的には、スムーズな相互読み替えが可能な教育・評価・教務制度の実現、学部から大学院までの連続した教育プロセスのさまざまな段階で交換留学、共同教育が可能になる仕組みづくり(導入的SS/SV、共通教養教育、長期留学、専門分野での教育連携、大学院での研究・教育連携、共同学位の授与)を一層推進する。この柱となる制度をさらに魅力的な内容にするため、実践型スキルを高める課題解決型教育の充実、留学や国際インターンシップと連動した実践力の育成、吉林大学の国際連携大学院構想への参加、成均館大学校の学部から大学院へ繋がる古典学課程の展開との連携、到達レベルが外部から把握しやすく質保証と直結した客観的で厳密な評価システムの構築、幅広い単位互換を実現する教務制度を、各国の現行制度のすり合わせを行いながら実現する。こうした制度を確立することによって、日中韓の間でのさらに高い学生モビリティを可能にする。3大学は、プログラムに参加する学生のモビリティが地理的にも大きく拡大し、日中韓コンソーシアム内のみならずASEAN+3、さらには欧米諸国にまで拡大し、アジア高等教育圏が形成されることを展望している。こうした構想を踏まえながら、本プログラムではとりわけ地域中核人材育成に注力する。具体的には、東アジアの発展に資する専門的知識・能力を備え、「就職力」の高い人材を育成し、3大学が東アジアの次世代を担う中核的専門職業人(アジアクラット)の育成拠点および国際人材交流ネットワークの拠点となることを目指すことを目的とした。

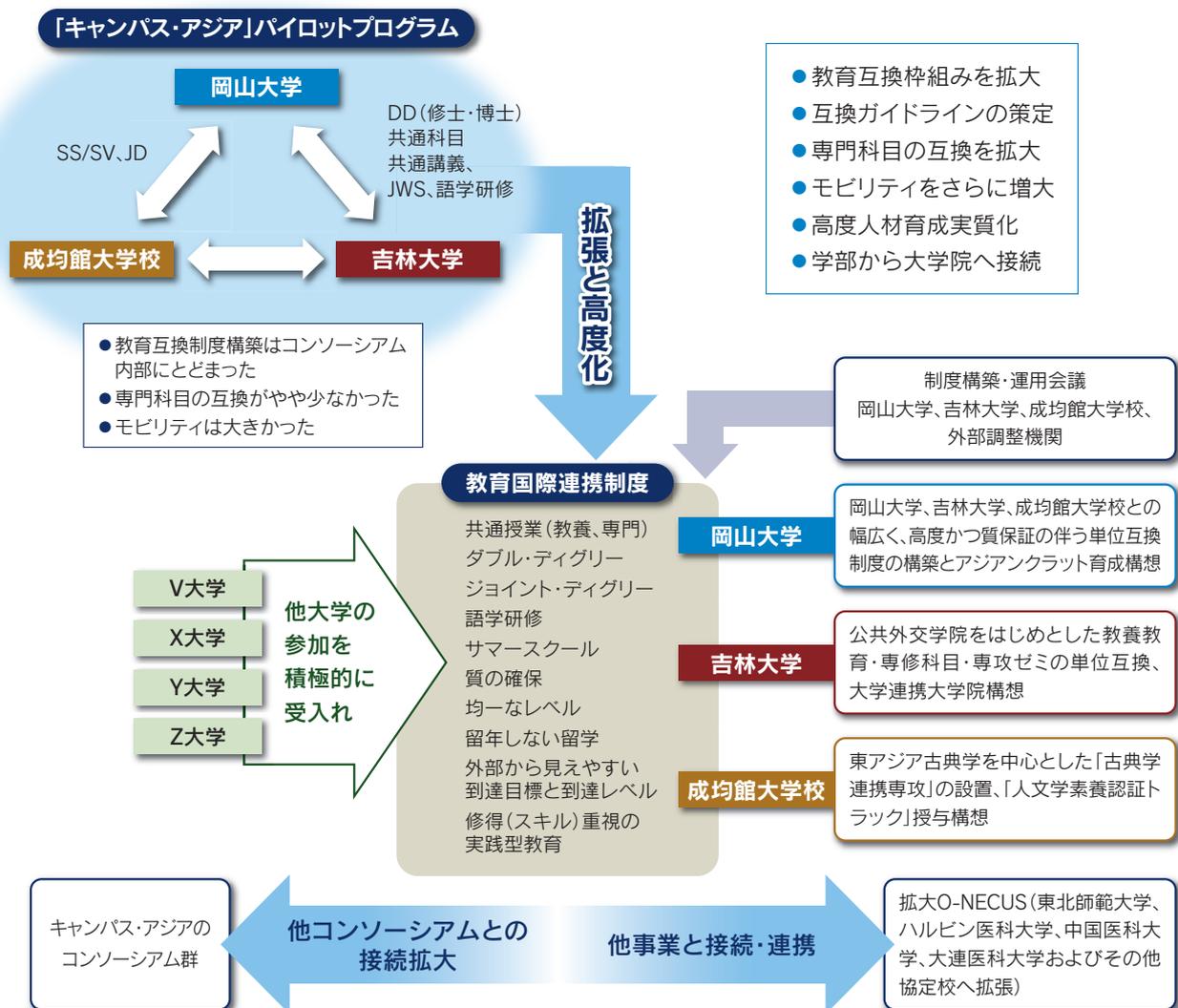


図1 日中韓学生教育相互制度モデルの拡張と高度化

2) 養成する人材像

本事業では、東アジア、さらにはアジア全域で活躍する次世代中核的専門職業人をアジアクラットと呼び、そうした能力と資質を備えた「就職力」の高い学生を養成する。具体的な人材像を以下に示す。

- マルチリンガル: 母国語以外に英語プラス地域言語を運用する能力がある人材である。
- 人文・社会学系、自然科学系、医歯薬学系などの所属に応じた専門的知識・能力: 人文・社会学系においては、人間文化の基礎をなす文化、思想、社会に関する理解を基礎とし、国際、文化、歴史等の比較研究を通じて社会や文化の多様なあり方について多角的に考察し、異なる社会と文化が共生するための方法や制度を探究することができる企業人や研究・教育人材である。自然科学系においては、国際的視野での学際的・先端的研究へのチャレンジの担い手となる高度な問題解決能力と課題探求能力を備え、

その成果による次世代パラダイムの構築を担う人材である。医歯薬学系においては、ナノバイオ研究、遺伝子解析および先端医療材料基礎研究、地域医療、特に、岡山大学を中心とした日中韓で共同研究の実績がある、アジア人の癌体質の研究、前立腺癌の解析と遺伝子治療などの分野で世界水準の人材である。

- グローバルかつリージョナル：国際的な視野を持つとともに地域固有の文化に精通し、アジア各国の深い伝統的な教養を理解すると共に、常に理解の深化に務める人材である。
- 将来の東アジアを産学官各分野で担うことのできる人材：東アジア的文化共通性、共生と協力の東アジアを念頭に、アジアの価値観を広く共有できる地域行政、企業・組織の指導者、地域医療のリーダー、技術開発、生産、販売などの各々の分野で3国の協業をリードできる企業中堅幹部候補、また環境、エネルギー、循環型社会の構築など、現代社会が抱える課題解決へ向けてリーダーシップのとれる人材である。

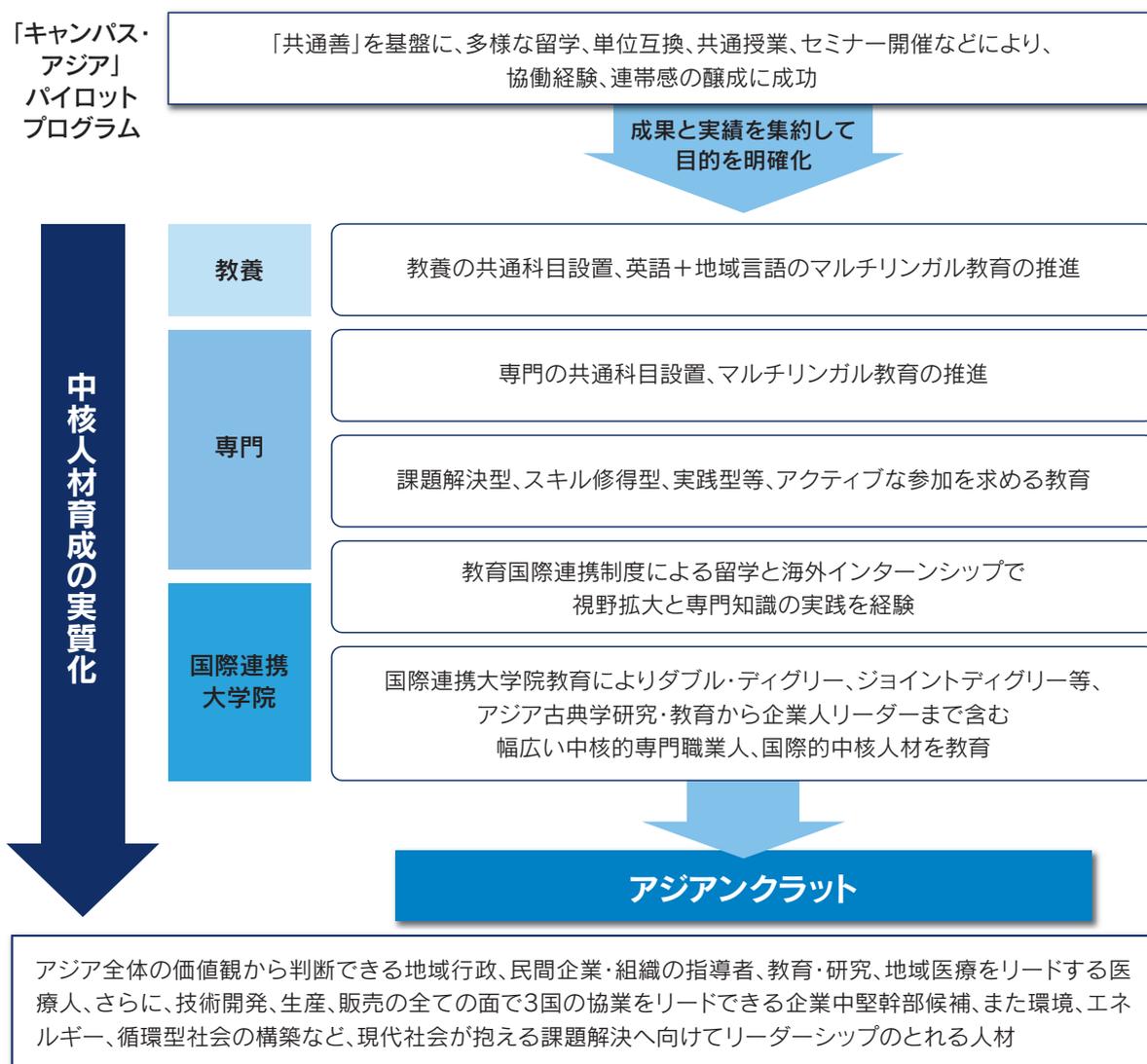


図2 アジアンクラットの育成



3) 質保証を伴った教育システム

〈概要〉

第2期のキックオフ・ミーティングにて、パイロット事業の成果と課題の整理を行い、大学間交流の枠組みについて議論し、以下の枠組みに合意した。

- 日中韓三国の交流の裾野を支える、高いモビリティの確保
- 共同教養教育を踏まえ、専門教育連携を高める教職員交流の活性化
- 専門教育での共通教育を実現するための早期語学習得システムの運用
- 日中韓三国協力事務局との連携など国際インターンシップ等の実施
- 人文・社会学系、医歯薬学系、自然科学系のプログラム開発
- ダブルディグリープログラムの実施
- 上記の交流活性化による、国際連携大学院構想の推進

この計画に則り、本事業により目標とする次世代中核的高度実践人(アジアクラット)の育成のため、日・中・韓に共通する諸課題を取り上げ、中核的高度実践人としての能力と資質を養成する目的に合致する授業科目を既存科目の中から選定し、「CA共通科目」としてキャンパス・アジア科目体系に組み込むことによって、相互の留学生がより多くの科目を履修し単位認定ができる仕組みを構築してきた。また、新たに開設した「東アジア・リーダーシップ論」を必修科目とし、コンソーシアム校と協働で作成した共通教科書を使用した。

他方、サマー・スプリングスクール、日中韓留学ワークショップなどの学部生向けの導入プログラムから、6月又は1年の長期留学プログラム、ナノ・バイオコース、先端医療応用コースなどの大学院レベルの専門教育プログラムまで、様々な独自プログラムをコンソーシアム校と協働で実施してきた。また、将来グローバルに活躍できる人材の育成のため、専門性の深化、キャリア形成を意識した実践型教育、語学力向上を柱に「就職力」を高めるプログラム内容にした。

プログラム実施にあたっては、受け入れ前の指導教員とのマッチングによる適切な履修指導、厳格な成績管理、共通教科書の活用、教職員の相互派遣や三大学定例会議等によるピアレビューなどを行うことで、質の保証を十分に担保した。また、学位取得を伴う相互学生交流の推進のため、専門教育分野の交流プログラムを拡充し、大学院生を対象としたプログラムを多く実施した。その結果、本学博士後期課程のダブルディグリープログラムに成均館大学校の学生1名を受入れたことは特筆に値する。

最後に、第2期の最終年度はコロナ禍の影響で、実留学を伴う受入・派遣プログラムがすべて中止されたが、3大学での交流を継続するため、共同のオンライン講義を実施した。

今後も継続して、3大学間で相互に行えるような教育交流、学位取得を伴う相互学生交流の枠組み作り、共通教育科目の充実、ダブルディグリープログラムの学生募集に注力する。

① 開講科目の充実と履修の体系化

大学の世界展開力強化事業(キャンパス・アジア)「東アジア高等教育圏を見据えた中核的高度実践

人＝アジアクラット育成プログラム」による受入留学生の授業科目履修と修了に関する申合せ(平成29年12月20日学長裁定)(※13～16ページ参照)を制定し、開講科目の充実と履修の体系化を図った。

具体的には、日中韓に共通する諸課題を取り上げ、3国間の将来を担う中核的高度実践人育成のための授業科目として「CA共通科目」を新たに開設・選定し、履修コースを体系化した。また、「東アジア・リーダーシップ論」を必修科目とし、指導教員演習科目、全学日本語コース科目、部局専門科目から成る授業群から14単位以上取得することをコース修了の要件とした。

「東アジア・リーダーシップ論」は、次世代のリーダーに必要な地域的・国際的視野を持ち、日中韓に共通する、また共有する課題について、柔軟に思考し議論する力を身につけるため、国連「持続可能な開発目標(SDGs)」を念頭に、また岡山の地域性を踏まえ、東アジアにおける日中韓の相互関係性を取り上げた。人文・社会学系を中心に、自然科学系、医歯薬学系の視点も加え、東アジアにおける持続可能な発展に向けた現状と課題を検討し、包括的、学際的、多面的な知識の習得を通して、将来における日中韓の関係と大学、行政、企業、NPO等の組織及びリーダーの役割について考察した。

専門科目では、各部局の開講科目の中から「CA共通科目」を選定し、交換留学生はこれらの科目を選択履修した。例えば、社会文化科学研究科では、同研究科に設置されている「東アジア共生プログラムコース」の授業科目が主に「CA共通科目」として選定され、交換留学生の履修に供された。「東アジア共生プログラムコース」は、岡山および東アジアの各地域文化や社会についての学びの場を通じて、東アジア域内の各地域が深いレベルでつながりあっていることへの理解を図るとともに、また学生同士の対話や地域との交流を通じて、自らの地域だけではなく、東アジアの他の地域にも心を寄せうる人材の育成を目指し、同研究科博士前期課程に設置された特別履修コースである。

中核となる「東アジア・リーダーシップ論」をはじめ、各部局で開講される関連の授業群を「CA共通科目」として整備し、交換留学生による履修が可能となったことで、交換留学生はこれまでより系統的・計画的な履修が可能となり、限られた留学期間のなかで最大の成果を得ることができるようになった。

② 大学間交流の枠組形成に向けた取り組み

◇ 緊密な学習指導体制に基づく留学プログラム

従来アカデミック・アドバイザー制度を発展させたマッチング制度を導入することで科目・分野の不適合を未然に防止した。また、学生の専門性と学習計画について事前にきめ細やかに評価・検討することで、確実に単位互換ができる科目を設定し、履修しやすかつ出口管理を厳密に実施できる工夫を行った。専門教育については、各大学での既取得科目や内容が異なる場合が多いため、最小限の到達範囲を定め、履修しやすくする工夫を行った。このように、ラーニング・アグリーメントの考え方を履修科目指導に活用し、学生の学習支援及び個別指導を行った。

◇ 目標達成度の評価

厳格な成績管理のため、交流プログラムを授業科目として単位付与することを原則とし、各大学の基準に基づいた成績評価を厳密に実施した。また、授業科目としない場合でも、参加学生に事前にプログ



ラムの修了基準を示したうえで、基準を満たした者に対しプログラム修了証を交付した。

また、本学から派遣するキャンパス・アジア留学生は、吉林大学や成均館大学校では、現地での語学習得を目的とする学生が多いが、これらの学生の語学能力の伸長を計測するために、令和元年(2019年)度から、出発前には本学語学教員による試験、留学後には公的な語学試験の受検を必須化し、目標達成度を評価できるシステムを構築し、学習成果の評価と外部評価システムを導入した。

派遣先(期間)	派遣前言語レベル	派遣後言語レベル
中国・吉林大学(半年間)	HSK4級	HSK6級
中国・吉林大学(1年間)	初級	HSK5級
韓国・成均館大学校(1年間)	初級	TOPIK6級
韓国・成均館大学校(1年間)	TOPIK2級	TOPIK6級
韓国・成均館大学校(1年間)	TOPIK2級	TOPIK6級
韓国・成均館大学校(半年間)	TOPIK6級245点	TOPIK6級276点
中国・吉林大学(半年間)	HSK3級	HSK5級
中国・吉林大学(1年間)	初級	HSK6級
中国・吉林大学(半年間)	初級	HSK5級
韓国・成均館大学校(半年間)	初級	TOPIK5級
韓国・成均館大学校(半年間)	TOPIK4級	TOPIK6級
中国・吉林大学(1年間)	初級	HSK5級
韓国・成均館大学校(1年間)	初級	TOPIK5級
韓国・成均館大学校(半年間)	初級	TOPIK6級

表1 語学能力の伸長

◇ 共通教科書の編纂

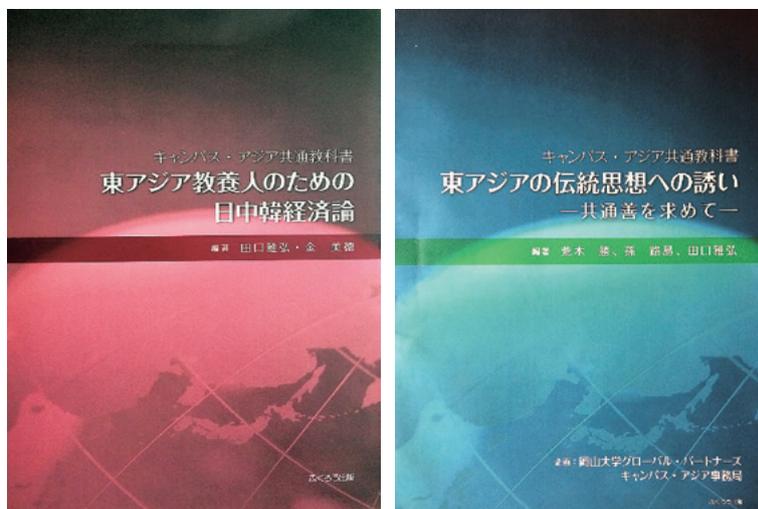
共通教科書の作成と利用は、第1期のキャンパス・アジアプログラムから引き継がれた課題である。具体的には、議論をすればするほど相互の見解の違いが明らかになり、共通の内容で合意するのが非常に困難であること、それぞれの国で長年にわたって確立されてきた教育理念や教育方法を画一化することに異論が大きいことが課題であった。

最終的には、基礎的な問題理解について共通認識を固め、各論については学生たちが議論する素材を与えるような内容にし、教科書を使った討論ベースの授業を構築すること、サマースクールなどで積極的に教科書を利用し、内容の改善を図っていくことで基本的方向が定まった。

第2期では、これまでに作成された教科書を授業等で使用する中で見つかった問題点を改善し、新たに下記の共通教科書を作成し、キャンパス・アジア必修科目である「東アジア・リーダーシップ論」等において利用した。

『キャンパス・アジア共通教科書 東アジア教養人のための日中韓経済論』

『キャンパス・アジア共通教科書 東アジアの伝統思想への誘いー共通善を求めてー』



◇ 学位取得を伴った教育プログラムの促進

専門教育分野における交流を強化し、各部局の専門プログラムにおいて大学院生レベルでの研究室交流を行い、ダブルディグリープログラムへの参加の促進を図った。

医歯薬学総合研究科(薬学系)では、博士後期課程のダブルディグリープログラムに成均館大学の学生を1名受け入れた。この学生は令和2年9月に本学大学院を単位取得満期退学し、現在、両大学の指導教授のもとで博士論文の提出に向け準備を進めている。

③ 将来グローバルに活躍できる人材像とそれに基づく交流プログラム

本事業では、東アジア、さらにはアジア全域で活躍する次世代中核的高度実践人をアジアクラットと呼び、そうした能力と資質を備えた「就職力」の高い学生の育成を目的に、専門性の深化、キャリア形成を意識した実践型教育、語学能力の向上を柱にプログラムを実施した。

◇ 専門性の深化

人文・社会学系においては、人間文化の基礎をなす文化、思想、社会に関する理解を基礎とし、国際、文化、歴史等の比較研究(例:成均館大学校、アジア古典学課程構想)を通じて多様な社会や文化について多角的に考察し、異なる社会と文化が共生するための方法や制度を探究することができる人材の育成を目的に行った。受入れについては、大学院生に対して、受入研究室において学生の研究テーマに基づき研究指導を行うインデペンデント・スタディなどの個別プログラムを実施した。また、海外法政研修、東アジア歴史文化学セミナー、海外法政・歴史文化演習プログラム等の派遣プログラムを実施した。

自然科学系においては、国際的視野での学際的・先端的研究へのチャレンジの担い手となる高度な問題解決能力と課題探求能力を備え、その成果による次世代パラダイムの構築を担う人材育成を行うため、受入留学生に対しインデペンデント・スタディなどの個別プログラムを実施した。また、吉林大学植物科学



学院と4年間にわたり、ラボワークとフィールドワークを通して、東アジアを中心に国際的に活躍できる人材の育成を目指し、大学院博士前期課程・後期課程の学生の交流を双方向で実施した。また、成均館大学校とは、光機能材料ワークショップ、光化学セミナーを実施したほか、平成30年(2018年)には、岡山大学から大学院生1名が研究留学し、光機能性材料・光触媒に関する共同研究を行った。

医歯薬学系においては、パイロットプログラムでナノ・バイオコースおよび岡山大学を中心とした日中韓での共同研究教育の実績があり、先端医療応用コース長期および短期の2プログラムを展開した。これらのプログラムは、いずれの分野においても、基礎教育の共通授業と共に、課題解決の力を養成する実践型を中心に据えたものである。

◇ キャリア形成を意識した実践型教育

日本の高等教育機関での教育を受けた優れた学生の我が国における就職をサポートするため、キャリア形成を意識した実践型教育を実施した。

具体的には、日中韓ワークショップにおいて、韓国の日中韓三国協力事務所を訪問し、経済、運営、人材開発の各分野の担当者との意見交換の場を設けた。ソウル観光マーケティング公社にて、観光政策の説明、韓方医学、メディカルツアーの現場見学を行った。日本大使館広報文化部にて、大使館や外交官の役割を中心に担当書記官から説明を受けるなどのプログラムを実施し、学生に職業観やキャリア形成を意識させる内容にした。

リージョナル・カンファレンスでは、日中韓の地域中核人材を目指す学生が、書籍からの情報だけではなく、実際に地域に足を向けて、企業視察や地域住民との交流を通じて現状と問題点を体験できるプログラムにした。また、授業には「多言語セミナー」方式を取り入れ、数カ国語でディスカッションを行う訓練を導入した。「多言語セミナー」は、ひとつの授業でたくさんの言語を併用する授業形式をとる。グループディスカッションでは、英語、日本語、中国語、韓国語のグループに分かれ、各グループ(例えば韓国語)には、韓国語を母国語とするファシリテーター役の学生、韓国に長期留学した日本人学生、韓国語が話せる中国人学生、韓国語を学び始めて留学を希望する日本人学生などが参加し、討論を行った。さらに、対話、講義の後にディスカッション、プレゼンを入れることにより、その場ですぐに議論し、多国籍の学生たちの意見をまとめる訓練を行い、リーダーシップ、調整能力、プレゼン能力、語学能力などを同時に養った。

◇ 語学能力の向上

本プログラムの特徴であるマルチリンガルという高い語学目標の達成を保証するため、韓国語と中国語の専門教員をワーキンググループに加え、サマースクール等で、学部学生を主対象とした語学研修を実施し、早期に語学習得できる環境を整えた。また、参加学生にはL-café(多言語コミュニケーションスペース)での韓国語・中国語の学習継続や、長期留学の募集時に個別に声掛けをするなど長期留学を促した。

④ オンライン講義の充実 ~COVID-19への対応

COVID-19の拡大のため、コンソーシアム校同士の相互往来は極度に制限された。この状況の中、交流

を継続するため、2020年7月の三大学定例会議の合意に基づき、オンラインによるアカデミックセミナー(岡山大学主催: 15演題; 吉林大学主催: 10演題)及び集中講義(2科目)を実施した。また、教育の質を保証するため、オンライン講義の受講者に対し、以下の最低限の語学力を求めた。TOEFL (500PBT / 61iBT)、IELTS (5.5 overall)、or TOEIC (580)

コロナ禍の影響がいつまで継続するか不透明な状況であるが、今回のオンラインによる海外大学との交流の経験を活かし、留学前の事前教育に組み合わせ活用するなど、新しい国際学生交流の可能性を広げるよい機会となった。

アカデミックセミナーの演題一覧は46～47ページを参照。

⑤ コンソーシアム校との協働と教職員相互派遣による質保証

各コンソーシアム校教員と協働で、共通教科書の編纂、サマー・スプリングスクール、日中韓留学ワークショップ、ナノ・バイオコース等の独自プログラムを実施した。

質保証の一環として、指導教員とのマッチングを円滑に行うため、コンソーシアム校の研究室同士の相互訪問や共同授業、研究活動の情報発信の機会を頻繁に設け、教員の流動性を高めるとともに、学生の学習支援、専門教育の質の向上、ピアレビュー等により教育の質を担保した。

また、各コンソーシアム校から学部学生・大学院生と教員が参加するワークショップやシンポジウムを開催し、高等教育機関の役割、東アジアにおけるSDGsの課題等について各国の文脈に基づいた発表や意見交換を行った。

さらに、三大学定例会議等において、互いのプログラムの成果報告及び質保証を含めた事業計画の進捗や要望等について意見交換を行った。



大学の世界展開力強化事業(キャンパス・アジア)「東アジア高等教育圏を見据えた中核的高度実践人＝アジアクラット育成プログラム」による受入留学生の授業科目履修と修了に関する申合せ

〔平成29年12月20日〕
〔学長裁定〕

1 趣旨

平成28年度に採択の大学の世界展開力強化事業(キャンパス・アジア)「東アジア高等教育圏を見据えた中核的高度実践人＝アジアクラット育成プログラム」(以下「CA人材育成プログラム」という。)において、プログラムの趣旨実現のため、共通科目(以下「CA共通科目」という。)の開講、受入留学生の授業科目の履修及び修了要件等に関して、必要な事項を定める。

2 CA共通科目の定義

CA共通科目とは、CA人材育成プログラムに基づき、学部及び研究科において受入する留学生(以下「CA学部留学生」又は「CA大学院留学生」という。)への開講科目として、日・中・韓に共通する諸課題を取り上げ、3国間の将来を担う中核的高度実践人育成のための授業科目をいう。

3 CA共通科目の選定・決定

(1)学部、研究科又はグローバル・パートナーズは、CA共通科目の開設・選定の作業を行い、グローバル・パートナーズ関連の会議での審議を経るとともに、開講する学部または研究科で授業科目として審議・承認された後、決定される。

(2)CA共通科目として、別表1の通りCA学部留学生およびCA大学院留学生の必修科目として開講する。

4 授業科目の履修

CA学部留学生およびCA大学院留学生は、別表1のCA共通科目を必修科目として履修するとともに、指導教員の指導のもと、所属する学部・研究科の授業科目、及び全学日本語コース科目等から、学生の留学目的に合致するものを履修するものとする。

5 単位の認定

CA学部留学生およびCA大学院留学生が履修する科目の単位認定は、開講する学部、研究科の規程に基づき授業担当教員が行う。

6 修了要件

キャンパス・アジアプログラムを通じて学部・研究科で受入を行う留学生の修了要件は、別表2のとおりとする。

7 事務

CA共通科目、授業科目の履修及び修了認定に関する事務は、関係する学部、研究科事務部とグローバル・パートナーズ事務部が連携して実施するものとする。

別表1

授業科目
東アジア・リーダーシップ論

別表2

研究科<半年コース用>

科目	選択・必修の別	単位数	備考
東アジア・リーダーシップ論	必修科目	1単位	
全学日本語コース科目	選択必修科目	2単位以上	プレメントテストによるクラス
部局専門科目(演習科目、留学生の専門科目含む)	選択科目	4単位以上	留学期間満了直前の「学生フォーラム」での発表が必要
合計		14単位以上	

学部<半年コース用>

科目	選択・必修の別	単位数	備考
東アジア・リーダーシップ論	必修科目	1単位	
全学日本語コース科目	選択必修科目	2単位以上	プレメントテストによるクラス
部局専門科目(演習科目、留学生の専門科目含む)	選択科目	4単位以上	留学期間満了直前の「学生フォーラム」での発表が必要
一般教養科目	選択科目		
EPOK科目	選択科目		
合計		14単位以上	

研究科<1年コース用>

科目	選択・必修の別	単位数	備考
東アジア・リーダーシップ論	必修科目	1単位	
全学日本語コース科目	選択必修科目	4単位以上	プレメントテストによるクラス
部局専門科目(演習科目、留学生の専門科目含む)	選択科目	8単位以上	留学期間満了直前の「学生フォーラム」での発表が必要
合計		28単位以上	

学部<1年コース用>

科目	選択・必修の別	単位数	備考
東アジア・リーダーシップ論	必修科目	1単位	
全学日本語コース科目	選択必修科目	4単位以上	プレメントテストによるクラス
部局専門科目(演習科目、留学生の専門科目含む)	選択科目	8単位以上	留学期間満了直前の「学生フォーラム」での発表が必要
一般教養科目	選択科目		
EPOK科目	選択科目		
合計		28単位以上	



以下は参考(2019.12更新)

別紙 学生が履修する授業科目

社会文化科学研究科(博士前期課程)

授業科目	教員名
社会文化学基礎論1・2	
日本文化研究1	
対照音韻論1・2	陳 南澤
地域創生特別講義	中村 良平
経営者特別講義	西田 陽介
日本美術史1	佐々木 守俊
日本美術史演習1・2	佐々木 守俊
日本語構造論2	江口 泰生
日本語構造論演習1	江口 泰生
東南アジア史2	渡邊 佳成
東南アジア史演習2	渡邊 佳成
東アジア古代・中世史1・2	土口 史記
東アジア古代・中世史演習1・2	土口 史記
中国の思想1・2	孫 路易
学術英語演習	シミッチ 山下 ミラ
学術日本語演習	尾崎 奈津
文化交流論1・2	延味能都
日本近現代文学論2	西山 康一
日本近現代文学論演習2	西山 康一
現代日本語学2	宮崎 和人
現代日本語学演習2	宮崎 和人
近現代日本語論2	京 健治
近現代日本語論演習1・2	京 健治
談話文法論1	堤 良一
談話文法論演習1	堤 良一
現代日本経済史	尾関 学
現代日本経済史演習	尾関 学
中国経済論	滕 鑑
中国経済論演習	滕 鑑

文学部

授業科目	
人文学概説	哲学(1a、1b、2a、2b)
	倫理学(1a、1b、2a、2b)
	芸術学(1a1b、2a2b)
	西洋美術史(a、b)
	日本美術史(a、b)
	西洋思想史(a、b)
	日本思想史(a、b)
	美学(1a、1b、2a、2b)
	心理学(1a、1b、2a、2b)
	人文地理学(a、b)
	自然地理学(a、b)
	社会学(1a、1b、2a、2b)
	文化人類学(a、b)
	社会文化学(a、b)
	日本史(1a、1b、2a、2b)
	アジア史(1a、1b、2a、2b)
	西洋史(1a、1b、2a、2b)
	考古学(1a、1b、2a、2b)
	言語学(a、b)
	日本語学(1a、1b、2a、2b)
	英語学(a、b)
	フランス語学(a、b)
	日本文学(1a、1b、2a、2b)
中国語文化学(1a、1b、2a、2b)	
英語圏文学(a、b)	
ドイツ言語文化学(a、b)	
フランス文化史(1a、1b、2a、2b)	
中国文言小説簡史	橘 英範
漢文・中国語文献研究法a、b	遊佐 徹
中国古典詩における恋愛	橘 英範
日本語1a、1b、2a、2b	堤 良一
日本語の歴史1、2	江口 泰生
日本美術史講義	佐々木 守俊
美術史概説1	龍野 有子
日本史概説2	徳永 誓子

- ① 受講にあたっては授業担当教員の許可が必要であること
- ② すべての科目が毎年度開講されるとは限らないこと

経済学部

授業科目	教員名
グローバル経済入門	田口 雅弘
日中の経済関係	藤 鑑
日本経済入門	釣 雅雄



4) 実績概要

第2期キャンパス・アジア事業の実績概要を以下に記す。

- ① パイロット事業において開発された交換留学プログラムや体験型研修プログラムを基盤として、専門教育プログラムを拡充し、総計派遣231人、受入239人と高いモビリティを維持した。2016年度～2018年度は目標値を上回る交流数を達成した。残念なことに、2019年度終盤から新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響により、国境を越えた人の自由な往来が著しく制限されたために、計画していた多くの派遣・受入事業を中止、または、延期せざるを得なかったが、中止した4件の計画を含めると2019年度も目標値を大きく上回る交流数となる見込み(目標値70人に対し、派遣74人、受入102人)であった。また、2020年度は、一部のプログラムをオンラインで実施したほか、オンラインアカデミック・セミナーを開催し、三大学間の交流を維持した。
- ② 実施プログラムは、次のとおりである。

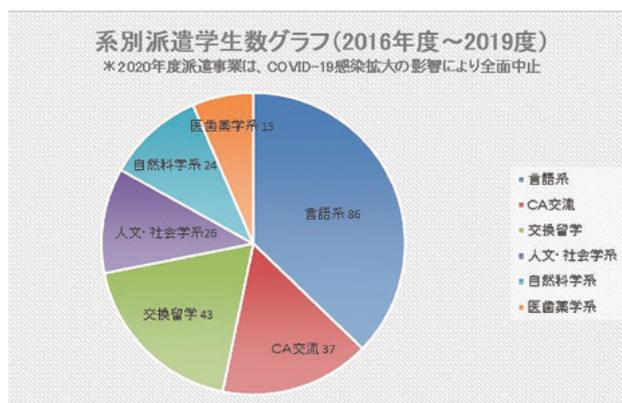
交換留学プログラム派遣・受入(共に、吉林大学・成均館大学校)；語学研修プログラム派遣・受入(吉林大学・成均館大学校)；人文・社会学系プログラム・東アジア歴史文化学セミナー派遣(吉林大学等)；人文・社会学系プログラム・海外(中国)法政研修派遣(吉林大学等)；先端医療応用コース医学系・長期受入(吉林大学)；先端医療応用コース薬学系派遣・受入(成均館大学校)；自然科学系プログラム(生命資源科学)派遣・受入(吉林大学)；自然科学系プログラム(有機機能材料学)受入(成均館大学校)；アジア・エリートプログラム受入(吉林大学)
- ③ 2019年にコンソーシアム3大学会議を韓国・成均館大学校にて開催した。その場において、各種事業プログラムの他、岡山大学社会文化科学研究科と吉林大学および成均館大学校との間にダブル・ディグリー制度による学生の交換等、本補助事業終了後の自立的な運営に関して、活発な意見交換を行った。なお、岡山大学薬学系博士後期課程では、成均館大学校薬学系大学院生をダブル・ディグリーコースに受入れた実績もある。2020年はコロナ禍のために岡山大学が主催してリモートコンソーシアム3大学会議を開催した。計画していた多くの事業を中止せざるを得ない状況を打破するために、3大学コンソーシアムでオンラインによるセミナーや授業を提供することとし、SDGsに関連するテーマを中心に実施した。
- ④ キャンパス・アジア事業を全学体制で実施するため、各学系教員、語学教員、キャンパス・アジア担当教員等からなるワーキング・グループを設置し、事業の進捗状況を確認し、各プログラムの評価、見直しを行った。
- ⑤ 「東アジア・リーダーシップ論」をキャンパス・アジア共通科目として必修化し、履修の体系化を図った。また、当該科目履修を経て、各期留学修了前に『キャンパス・アジア学生フォーラム』を開催し、留学の成果報告を行った。
- ⑥ 質保証の一環として、アカデミック・アドバイザーとのマッチングが円滑になるようにするために、理科系大学院ではコンソーシアム校研究室同士の相互訪問や、研究活動の情報発信の機会を頻繁に設けた。また、全般においても、プログラム体系が十分に理解できるようにプログラムの周知・広報を行った。
- ⑦ 具体的に受入学生候補の推薦があった際には、指導教員の選定をキャンパス・アジア事務局と各部局との間の緊密な連絡により、ラーニング・アグリーメントの考え方を履修科目指導に活用し、学習・研究ニーズ調査と提供科目のマッチングを行った。
- ⑧ プログラムに参加したことで母語以外の言語を通して国際的な視野を広げるとともに、実践に通用する高度な語学能力を身につけた「就職力」の高い人材を輩出できた。

5) 学生交流実績

《派遣プログラム》

年 度	プログラム名	プログラム実施期間	性 別		所 属		総計
			男	女	学部	大学院	
平成28年度 (2016年度)	長期交換留学(吉林大学)	2016.3~2017.1	1	1	2	0	2
	長期交換留学(成均館大学校)	2016.3~2017.2	1	3	4	0	4
	言語系中国語・中国文化短期留学(吉林大学)	2016.7.31~8.13	7	4	10	1	11
	言語系韓国語・韓国文化短期留学(成均館大学校)	2016.7.31~8.23	0	12	12	0	12
	CA中韓ワークショップ(中国・韓国)	2017.2.19~3.1	1	16	17	0	17
	自然科学系ワークショップ(吉林大学)	2017.3.15~3.18	0	3	0	3	3
	小計		10	39	45	4	49
平成29年度 (2017年度)	長期交換留学(吉林大学)	2017.3~2018.1	3	2	5	0	5
	長期交換留学(成均館大学校)	2017.3~2018.2	0	3	2	1	3
	言語系韓国語・韓国文化短期留学(成均館大学校)	2017.8.8~8.24	1	11	12	0	12
	言語系中国語・中国文化短期留学(吉林大学)	2017.8.13~8.26	5	4	8	1	9
	医歯薬学系・先端医療応用コース(成均館大学校)	2017.9.22~9.26	3	2	5	0	5
	自然科学系・人文・社会学系ジョイントワークショップ(吉林大学)	2017.10.10~10.19	5	1	0	6	6
CA中韓ワークショップ(中国・韓国)	2018.3.6~3.16	5	10	14	1	15	
	小計		22	33	46	9	55
平成30年度 (2018年度)	長期交換留学(吉林大学)	2018.3~2019.1	2	4	6	0	6
	長期交換留学(成均館大学校)	2018.3~2019.2	1	8	8	1	9
	言語系韓国語・韓国文化短期留学(成均館大学校)	2018.8.9~8.21	0	12	12	0	12
	人文・社会学系ワークショップ(吉林大学)	2018.9.3~9.10	0	2	0	2	2
	言語系中国語・中国文化短期留学(吉林大学)	2018.9.10~9.21	5	6	11	0	11
	医歯薬学系・先端医療応用コース(成均館大学校)	2018.9.13~9.17	1	5	6	0	6
	自然科学系ワークショップ(吉林大学)	2018.10.11~10.18	1	4	0	5	5
	自然科学系研究室留学(成均館大学校)	2018.10.10~12.12	1	0	0	1	1
	自然科学系ワークショップ(成均館大学校)	2018.10.24~11.1	4	0	0	4	4
	人文・社会学系ワークショップ(吉林大学)	2018.11.7~11.9	3	1	2	2	4
Korean Studies Lab Exchange Program(成均館大学校)	2019.2.11~2.15	0	5	5	0	5	
	小計		18	47	50	15	65
令和元年度 (2019年度)	長期交換留学(吉林大学)	2019.3~2020.1	3	3	6	0	6
	長期交換留学(成均館大学校)	2019.3~2020.2	1	7	7	1	8
	言語系韓国語・韓国文化短期留学(成均館大学校)	2019.8.11~8.23	1	11	12	0	12
	人文・社会学系ワークショップ(吉林大学)	2019.8.29~9.5	8	12	19	1	20
	言語系中国語・中国文化短期留学(吉林大学)	2019.9.9~9.21	4	3	7	0	7
	医歯薬学系・先端医療応用コース(成均館大学校)	2019.9.19~9.23	0	4	4	0	4
	自然科学系ワークショップ(吉林大学)	2019.10.16~10.23	2	3	0	5	5
	(中止*1)自然科学系ワークショップ(成均館大学校)	2020.2.15~2.22	0	0	0	0	0
	小計		19	43	55	7	62
令和2年度 (2020年度)	COVID-19世界的感染拡大により令和2年度派遣プログラム全面中止		0	0	0	0	0
	小計		0	0	0	0	0
	総計		69	162	196	35	231

*1 COVID-19感染拡大の影響により中止

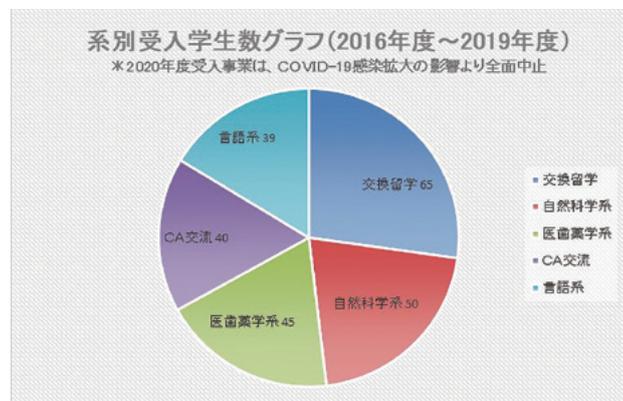




《受入プログラム》

年度	プログラム名	プログラム実施期間	所属大学		総計
			成均館大学校	吉林大学	
平成28年度 (2016年度)	長期交換留学	2016.4~2017.2	8	4	12
	CAスプリングスクール(日・中・韓合同ワークショップ)	2017.1.15~1.21	7	7	14
	言語系短期語学留学(成均館大学校)	2017.2.1~2.22	12	0	12
	医歯薬学系・先端医療応用コース(成均館大学校)	2017.2.6~2.16	9	0	9
	医歯薬学系・先端医療応用コース(吉林大学)	2017.3.7~3.11	0	4	4
	小計		36	15	51
平成29年度 (2017年度)	長期交換留学	2017.4~2018.2	7	9	16
	医歯薬学系(薬)先端医療応用コース(成均館大学校ダブルディグリー)	2018.1~2018.12	1	0	1
	医歯薬学系(医)先端医療応用コース(吉林大学基礎医学院)	2018.2~2018.12	0	1	1
	CAスプリングスクール(日・中・韓合同ワークショップ)	2018.1.21~1.30	8	7	15
	言語系短期語学留学(成均館大学校)	2018.1.29~2.16	12	0	12
	医歯薬学系・先端医療応用コース(成均館大学校)	2018.2.7~2.10	6	0	6
	自然科学系・ワークショップ(吉林大学)	2018.2.28~3.6	0	5	5
	小計		34	22	56
平成30年度 (2018年度)	長期交換留学	2018.4~2019.2	9	9	18
	医歯薬学系・先端医療応用コース(吉林大学基礎医学院)	2019.2~2020.1	0	2	2
	自然科学系・ワークショップ(成均館大学校)	2018.7.17~7.24	4	0	4
	医歯薬学系・先端医療応用コース(吉林大学)	2018.10.23~10.27	0	10	10
	医歯薬学系・先端医療応用コース(成均館大学校)	2019.1.15~1.22	6	0	6
	言語系短期語学留学(成均館大学校)	2019.2.8~2.21	15	0	15
	自然科学系・ワークショップ(吉林大学)	2019.2.27~3.7	0	10	10
	小計		34	31	65
令和元年度 (2019年度)	長期交換留学	2019.4~2020.2	8	11	19
	(中止*1)医歯薬学系(医)先端医療応用コース(吉林大学基礎医学院)	2020.1~2020.12	0	0	0
	自然科学系・ワークショップ(吉林大学)	2019.11.18~25	5	0	5
	CAアジアエリートワークショップ(吉林大学)	2019.11.19~20	0	11	11
	自然科学系・ワークショップ(吉林大学)	2019.12.2~12.4	0	26	26
	医歯薬学系・先端医療応用コース(成均館大学校)	2020.2.4~2.10	6	0	6
	(中止*1)CA成均館大学校・吉林大学交流プログラム	2020.2.6~19(20)	0	0	0
	(中止*1)自然科学系・ワークショップ(吉林大学)	2020.2.26~3.4	0	0	0
	小計		19	48	67
令和2年度 (2020年度)	COVID-19世界的感染拡大により令和2年度受入プログラム全面中止		0	0	0
	小計		0	0	0
	総計		123	116	239

* 1 COVID-19感染拡大の影響により中止



3 | 特色あるプログラム

1) 語学・文化交流プログラム

① 吉林大学夏期派遣プログラム

平成28年度(西暦2016年度)

2014年度に、本学キャンパス・アジア協定校の岡山大学(日本)と吉林大学(中国)と成均館大学校(韓国)の三校で使用する共通教科書の作成事業が正式に議題にとり上げられた。報告者は東アジア伝統思想部門に配属され、本学のこの部門の担当者となり、それ以降、幾度に渡って吉林大学と成均館大学校(以下「協定校」と言う)の担当者と連絡を取り、また協定校に訪問して「教科書の分担執筆者の確定、執筆原稿の分量(ページ数)、投稿締切日の日程調整、執筆担当者会議の開催日程調整、など」について事業推進の交渉を行った。2016年度に入って、教科書の各分担執筆原稿がすべて揃い、中国語原稿の日本語訳などについて、当時のキャンパス・アジア事務担当責任者の白栄勲氏と具体的な進め方について話し合いを続けていた。

2016年12月末に協定校の東アジア伝統思想部門の教科書分担執筆者の日本語訳原稿がすべて揃い、2017年1月に入って教科書の出版についての話し合いを幾度に渡って前副学長補佐の田口雅弘氏(本学経済学部教授)と行い、田口雅弘氏は出版社との交渉を担当し、報告者は自分の執筆文(「新儒教(朱子学)」と「熊沢蕃山」)の校正を担当するほかに、吉林大学執筆者の分担執筆文(楊軍教授の執筆文:「孔子の哲学」・馬衛東教授の執筆文:「儒家の原始経典の精神」と「伝統文化と現代中国」)の日本語訳の監訳(訳の部分的修正などの作業を担当)と校正を担当することになった。

2017年2月28日に『キャンパス・アジア共通教科書 東アジアの伝統思想への誘いー共通善を求めてー』(荒木勝・孫 路易・田口雅弘 編著)がふくろう出版から出版された。

平成29年度(西暦2017年度)

2018年2月にキャンパス・アジアワーキンググループ委員会の委員になった。以後、短期交流プログラムの開設を考案して、2018年度には「吉林大学中国語・中国文化短期研修プログラム」の実施を計画した。

平成30年度(西暦2018年度)

2018年6月から協定校(吉林大学の国際合作交流処及び国際教育学院)に連絡を取り、「吉林大学中国語・中国文化短期研修プログラム」の実施に向けて正式に交渉を始めた。8月に協定校から「研修期間は2週間で、国際教育学院で授業を受けること、宿泊費と学費を免除すること」という承諾を得て、プログラムの実施を正式に決定した。

9月に初回目の「2018年度吉林大学中国語・中国文化短期研修プログラム」を下記の内容で実施した。

(派遣全期間引率者:本プログラム担当責任者の孫 路易)

1. 研修場所 吉林大学国際教育学院 (中国長春市)
2. 研修期間 2018年9月9日(日)～9月22日(土) (移動日を含む)



3. 研修内容

9月10日(月) 開講式・オリエンテーション

9月10日(月)～9月20日(木)

午前:会話および読解・文法の授業(月曜～金曜) = 25時間

25時間(午前9時00分～11時30分) × 10日

午後:中国文化の授業(胡弓・中国書道・中国画・中国武術など)

9月14日(金)午後 日帰り旅行(偽満州皇宮を見学)

9月15日(土)16日(日) 学生交流と市内見学

9月21日(金) 修了テスト・修了式

4. 参加学生 10名(歯学部2名、工学部2名、医学部1名、文学部1名、教育学部1名、環境理工学部2名、マッチングプログラム1名)

5. 成績評価 研修終了後、100点満点で評価が行われ、成績証明書と修了証書が交付された。

成果:参加者のうち、1名(歯学部・赤井初妃)は2018年12月に中国語検定試験3級に合格。

令和元年度(西暦2019年度)

◆ 短期研修の実施

「2019年度吉林大学中国語・中国文化短期研修プログラム」を下記の内容で実施した。

(派遣全期間引率者:本プログラム担当責任者の孫 路易)

1. 研修場所 吉林大学国際教育学院 (中国長春市)

2. 研修期間 2019年9月8日(日)～9月22日(日) (移動日を含む)

3. 研修内容

9月9日(月) 開講式・オリエンテーション

9月9日(月)～9月19日(木)

午前:会話および読解・文法の授業(月曜～金曜) = 25時間

25時間(午前9時00分～11時30分) × 10日

午後:中国文化の授業(胡弓・中国書道・中国画・中国武術など)

9月12日(木)午後 日帰り旅行(偽満州皇宮を見学)

9月13日(金)14日(土) 学生交流と市内見学

9月20日(金) 修了テスト・修了式

9月21日(土) 帰国準備・岡大生同士(研修生と長期留学生)の学生交流

4. 参加学生 7名(文学部4名、法学部2名、経済学部1名)

5. 成績評価 研修終了後、100点満点で評価が行われ、成績証明書と修了証書が交付された。

成果：

1. 参加者のうち、1名(文学部・池田凜)は、2019年6月にHSK(漢語水平考試)3級に、2名(法学部・藤井将貴、経済学部・石橋直己)は2020年1月・8月に、HSK(漢語水平考試)4級に合格した。
2. 研修に参加した文学部の池田凜さんはキャンパス・アジア事業による、吉林大学春期長期留学の募集に応募し、留学が承認された。



「2018年度分」



「2019年度分」

◆「成均館大学校・吉林大学交流プログラム」の開設

2018年度に吉林大学国際合作交流処から「上記の短期語学研修と同等の条件と内容の研修を、岡山大学キャンパス・アジアで吉林大学の学生を受け入れて行ってほしい」という要請があったが、2019年度には吉林大学国際合作交流処から正式に本学キャンパス・アジア事務局に申し込みがあった。報告者がキャンパス・アジア担当責任者の神原信幸氏と相談し、キャンパス・アジアの交流プログラムとして毎年度2月中に行っている「成均館大学校交流プログラム」に吉林大学の研修生を受け入れることができれば、吉林大学国際合作交流処からの要請に答えることができる。神原信幸氏が「成均館大学校・吉林大学交流プログラム」を開設する旨の書簡を作成し、報告者がその書簡を中国語に翻訳し、神原信幸氏の書簡および中国語訳文を吉林大学国際合作交流処副処長の白氷氏に手渡し、岡山大学で毎年度行われている「成均館大学校交流プログラム」の実施状況を紹介した。その翌日に国際合作交流処で会議が開かれて本件について協議を行い、承認された。

11月に吉林大学国際合作交流処から「成均館大学校・吉林大学交流プログラム」の開設に承諾する正式な書簡(中国語文と英語翻訳文との各一部)が本学キャンパス・アジア事務局に届いた。

12月に入って報告者が所属している基幹教育センター初修外国語系で「成均館大学校・吉林大学交流プログラム」の2020年2月の実施に向けて準備を進めていたが、新型コロナウイルス感染症の拡大が原因で、中止することになった。

令和2年度(西暦2020年度)

◆「2020年度吉林大学中国語・中国文化短期研修プログラム」実施の中止

「2020年度吉林大学中国語・中国文化短期研修プログラム」を下記の理由で実施することができなかった。



2019年12月から新型コロナウイルスの感染が中国の武漢で拡大し、それによって感染死者が急増した事態になり、日本でも3月頃から感染が拡大し、感染死者の報告があり、中国と日本との間の民間航空の便が殆どストップされて、民間の文化交流がすべて停止した。このような状況が続く中で、本学キャンパス・アジア事務局が6月に今年度の「吉林大学中国語・中国文化短期研修プログラム」の実施を中止することを決定した。

私は、本プログラムの担当者として、来年度は新型コロナウイルスの感染が収まって「2021年度吉林大学中国語・中国文化短期研修プログラム」の実施が再開できること、祈っている。

◆「成均館大学校・吉林大学交流プログラム」実施としてのオンライン授業

2019年度「成均館大学校・吉林大学交流プログラム」の実施はコロナウイルス感染拡大が原因で中止されたが、今年度は本プログラムの実施としてオンライン授業を行うことが計画されて、実施に向けて準備を報告者が所属している基幹教育センター初修外国語系で進めてきて、現在では2021年2月15日～19日の間にオンライン授業を行うことを確定している。

② 成均館大学校夏期派遣プログラム

成均館大学校夏期派遣プログラムは、本学の協定校である成均館大学校との学生交流プログラムとしてCA事業の一翼を担うものであり、2007年から毎年12名の岡山大学生が成均館大学校を訪問し、2週間にわたる語学研修や社会・文化事情に関する講義の受講、さらには文化体験を通じて共通善についての理解を深めることに寄与している。

第2期キャンパス・アジア事業では、2016年度には3週間の研修、2017年度からは2週間の研修になっている。毎年12名の参加者が選考され、研修先での成績に基づき、「韓国語海外研修」の1単位として単位認定される。このプログラムは週5日、毎日4時間の韓国語授業とテスト、特別講演などで構成されている。2020年度には新型コロナウイルス感染症の影響で2021年2月にオンライン研修を企画している。

年 度	参加人数	実施期間	
2016年度	12名	2016年7月31日(日)～8月23日(火)	24日間(移動期間を含む)
2017年度	12名	2017年8月8日(火)～8月24日(木)	17日間(移動期間を含む)
2018年度	12名	2018年8月8日(水)～8月23日(木)	16日間(移動期間を含む)
2019年度	12名	2019年8月10日(土)～8月24日(土)	15日間(移動期間を含む)
2020年度	13名	2021年2月15日(月)～2月25日(金)	11日間 オンライン研修

12名の本学研修生に対しては、派遣前に通常の韓国語授業の履修のみならず、特別集中講義への参加や韓国人留学生との交流を勧めている。また派遣後にも韓国語カフェでの韓国語会話練習などをおこなうなどフォローアップに努めている。

研修先での集中的な韓国語学習ならびに現地学生との交流によって、本学研修生の韓国語運用能力は例年飛躍的な発展を見せている。さらにまた語学のみならず、韓国文化を紹介する授業や講演なども網羅する本プログラムはCAの理念への理解に大いに役立っている。参加した学生がその後に長期の韓国留学への道を選んでいることから、この派遣プログラムの成果が見て取れる。

スケジュールは以下のとおりである：

1日目		研修中	最終日
午前10時30分 午前12時	岡山発 ソウル着	オリエンテーション 韓国語授業 文化行事 学生交流 歓迎会 修了式	午前 8 時 ソウル発 午前 9 時30分 岡山着

●短期課程の日程

クラス	キャンパス	曜 日	内 容
正規授業	人文社会科学 キャンパス	月～金 9:00～13:00	文法2時間 会話2時間
午後の 特別クラス		月～金 14:00～15:30	歌クラス、文化体験行事等



●文化体験行事

短期語学研修は毎週多様な文化体験を実施しています。国立中央博物館、餅博物館、民俗博物館、キムチ博物館、戦争記念館、龍仁民俗村、遊園地、ソウル大公園など



③ 成均館大学校冬期受入プログラム

毎年2月に成均館大学校の学生が岡山大学で研修を受ける「成均館大学校冬期受入プログラム」は平成18年に開始、今年度で15回目となるが、2019年度からは吉林大学の学生も加わるプログラムになった。このプログラムは2週間にわたって週5日、毎日3時間の日本語授業とテスト、文化体験などからなる。さらに岡山大学の学生ボランティアが授業での課題や日常生活面での補佐役を務め、文化体験にも同行するなど、例年両校の学生間の交流が活発に行われている。

年 度	参加人数	実施期間	
2016年度	12名	2017年2月1日(水)～2月22日(水)	22日間(移動期間を含む)
2017年度	12名	2018年1月28日(日)～2月17日(土)	21日間(移動期間を含む)
2018年度	15名	2019年2月8日(金)～2月22日(金)	15日間(移動期間を含む)
2019年度	新型コロナウイルス感染症の影響で中止(成均館大学校の12名と吉林大学の4名が参加予定であった)		
2020年度	20名	2021年2月15日(月)～2月29日(金)	5日間 オンライン研修





単位認定においては、受講した授業のうち、語学授業については訪問先大学での成績に基づいて、所属大学で単位認定の申請を行うことができる(成均館大学校:日本語3単位)。スケジュールは以下のとおりである。

2019年2月 第13回成均館(ソングングァン)大学校交流プログラム					
	1限 8:40-10:10	2限 10:25-11:55			
2/8 金	岡山空港到着 9:30 (貸し切りバスで岡山大学へ)		11:40 ~ 13:10 B31 秋田 【0】始めましょう 【1】いろいろなことを調べてみましょう	13:20 ~ 14:50 B31 秋田 【2-1】倉敷に行きましょう	歓迎会(18:30~20:30) ビーチユニオン4階
2/9 土	倉敷美観地区見学・茶道体験 11:00 国際交流会館前から出発(貸し切りバスで)				
2/10 日	自由行動				
2/11 月	【2-1】倉敷に行きましょう C41 佐藤	【2-2】キャンパスを探検しましょう C41 佐藤	個別リサーチ/学生交流	個別リサーチ/学生交流	個別リサーチ/学生交流
2/12 火	【2-2】キャンパスを探検しましょう C41 佐藤	【2-3】マイマップを作りましょう C41 佐藤	個別リサーチ/学生交流	個別リサーチ/学生交流	個別リサーチ/学生交流
2/13 水	【2-3】マイマップを作りましょう C41 秋田	【3-1】興味を持ったことを、リストアップしましょう C41 秋田	生け花体験 13:30~15:30 場所:西川アイプラザ 13:00ごろ集合、岡山大学からバスで出発		個別リサーチ/学生交流
2/14 木	【3-1】興味を持ったことをリストアップしましょう C41 秋田	【2-4】週末の計画を立てましょう C41 秋田	個別リサーチ/学生交流	個別リサーチ/学生交流	個別リサーチ/学生交流
2/15 金	【2-4】週末の計画を立てましょう C41 秋田	【3-2-1】発表のテーマを決めましょう C41 秋田	佐野理事訪問 12:50~13:00 本館5階	個別リサーチ/学生交流	個別リサーチ/学生交流
2/16 土	自由行動				
2/17 日	自由行動				
2/18 月	【2-4】週末の計画を立てましょう C41 尾崎	【3-2-2】どんな内容にするか、話し合しましょう C41 尾崎	個別リサーチ/学生交流	個別リサーチ/学生交流	個別リサーチ/学生交流
2/19 火	【3-2-3】発表の準備、計画を立てましょう C41 尾崎	【3-2-4】発表のための言葉と表現 リストを作りましょう 【3-2-5】発表原稿を作りましょう C41 尾崎	個別リサーチ/学生交流	個別リサーチ/学生交流	個別リサーチ/学生交流
2/20 水	【3-2-5】発表原稿を作りましょう C41 佐藤	【3-2-6】発表の練習をしましょう 【4】振り返りましょう C41 佐藤	個別指導(報告書作成・研究発表会準備)		
2/21 木	修了試験 C41 佐藤・秋田・尾崎	発表会準備 佐藤・秋田・尾崎		研究発表会・閉講式 (14:30~16:30) C32 佐藤・秋田・尾崎	歓送会(18:00~20:00) ビーチユニオン4階
2/22 金	帰国(10:00岡山空港発) 8:00 国際交流会館前から出発(貸し切りバスで)				

★黄色は日本語授業

本プログラムは平成18年に発足以来、毎年参加者にも非常に好評で、本学および成均館大学校関係者からも高い評価を得ている。両大学間の留学生の数が、受け入れ・派遣共に年を追うごとに増加し実績を上げているが、長期留学への手始めとしての本プログラムの存在が大きく貢献していると言える。今後このプログラムをさらに発展させ、東アジアの架け橋になる人材の育成に努める所存である。

2) 専門教育プログラム

① 人文・社会学系(吉林大学)派遣プログラム

1. プログラムの趣旨・目的

本プログラムは、長春(吉林大学)およびその他の都市を訪問して短期研修を行うものであり、単位取得(1単位)を伴う。中国の法政・文化・歴史などに対する関心を持つ学生を集め、現地でのセミナー・学生交流・フィールドワークを通じた学習を行った。

本プログラムの参加者には、中国語履修歴を問うていない(期間中は教員が引率して通訳にもあたった)。これにより、語学に不安がある学生にとっての参加へのハードルを下げ、海外経験・国際交流への入門となる意味合いをも持たせている。一方で語学履修経験のある学生は積極的に中国語を用い、自身の能力を見つめ直す機会となった。一部の学生には、同年度のキャンパス・アジア語学研修(吉林大学夏期派遣プログラム)にも参加する者もいた。

また参加者は学部生のみならず、大学院生や中国人留学生をも含んでいる。院生には事前研修や現地におけるリーダーシップを求め、実際にそれを発揮してくれた。なかでも空港や街中での小規模なトラブルが発生した際、留学生の存在が大きな助けとなった。例えば空港で預け入れ荷物が出てこない、パスポートを紛失し公安に行く必要がある、などといったトラブルがあったが、これらに対処するには相当に高度な語学能力が必要となる。そこで、引率教員だけでなく、留学生もまた各処への問い合わせなどに協力し、スムーズなトラブル解決に貢献してくれた。

2. プログラムの内容

(1) 2018年度 海外法政研修(法学部)・東アジア歴史文化学セミナー(文学部)

法学部・文学部がそれぞれに研修を実施した。以下に学部ごとの研修内容を示す。

【法学部】(2018年9月実施)

本研修は、長春、北京の現地における法政教育の一環としたものである。参加者は、岡山からの5名と現地留学中の岡山大學生6名の11名で、吉林大学、北京大学、中国政法大学の他、日本企業および法律事務所などを訪問し、研究発表や討論会でのディスカッションを通して、両国の法律、文化等の理解を深めた。特に、吉林大学では、法学院のほか、行政学院や国際教育学院との交流も行い、北京大学法学院、中国政法大学では、中国語と日本語で講義を行い、日中双方の学生達に討論していただいた。また、SFTM長春豊越会社(中国第一汽車株式会社とトヨタ自動車の合弁会社)など日系企業および法律事務所では、今後の就職活動に参考となる内容も聞くことができた。





【文学部】(2018年11月実施)

5日間にわたり吉林大学に文学部生・院生を派遣した。研修に先立って2度の事前学習会を設け、院生には長春市の歴史および現在をテーマに発表してもらった。吉林大学では、古籍研究所の協力を得て、中国古代史をテーマとするセミナーを開催した。現地教員・院生およそ30名が参加し、会場では非常に活発な議論が交わされた。その後、同研究所の資料室および考古博物館の参観を行い、中国文化・歴史に関する専門的な資料実物を実見した。

また、吉林大学外国語学院において、日本語学科の授業体験と学生交流を行った。その後、国際交流処において現在岡山大学から吉林大学に交換留学中の学生や、キャンパス・アジアOBとの談話会をもうけた。さらに、偽満皇宮博物館を参観し、近代東アジア史および清朝の文化財に関する学習を行った。



(2) 2019年度「海外法政・歴史文化演習」

2019年8月～9月、10日間にわたり長春・北京において研修を行った。本年度は、それまで別々に実施していた法学部・文学部の研修を、合同で行うこととした。両学部合同の実施としたため、参加人数は本学在学中の中国人留学生3名を含め、総勢20名以上となった。長春・北京の二都市移動で負担がやや増えたものの、留学生や上回生らが学部の隔てなくリーダーシップを発揮してくれたことにより、大きなトラブルもなく実施することができた。

移動・宿泊・食事等は基本的に両学部合同で行い、またフィールドワークにおいても参加の自由度を高めて、学部にとらわれずグループに分かれ、それぞれの関心に従って行動することもあった。例えば、長春においては偽満洲皇宮博物館、北京においては紫禁城、国家博物館などである。歴史文物を実見することで、モノとしての史料の価値について考察を深め、また事前学習で得た長春・北京の歴史に関する知識を定着させる格好の機会となった。

一方、より専門的な内容のセミナー、交流は学部ごとで実施した。

【法学部】

吉林大学法学院における研究発表のほか、行政学院や国際教育学院との交流を行った。北京では、北京大学法学院、中国政法大学において中国語と日本語による講義を実施し、日中双方の学生達による討論を行った。研修に際しては岡山大学国際同窓会長春支部、北京支部の同窓生の方々の陰ながらのご協力をいただいた。





【文学部】

吉林大学古籍研究所にて引率教員(土口)による中国古代史に関するセミナーを実施した。同所の教員や院生40名ほどが出席し、岡山大学側の学生も交え、活発な討論が交わされた。また郊外にある吉林省博物院等で中国東北地方の歴史について学習した。北京では清華大学出土文献研究保護センターおよび北京大学古代史研究中心等において、最新の研究や史料に関するレクチャーを受けた。また北京大学に長期留学している

日本人大学院生2名とも合流し、中国での経験や生活環境の違いなど多方面のアドバイスを受けた。



(3) 2020年度 オンラインセミナー

本年度はコロナ禍により海外研修が実施不可能となったため、法学部・文学部それぞれにおいてオンラインセミナーを実施した。

【法学部】

2020年12月17日、教室参加とZOOMの併用(ハイブリッド)による交流を行った。参加者は、岡山大学現役学生20人とオンライン参加者14人を合わせて34人を得た。吉林大学法学院の傅穹先生により「上場会社における虚偽陳述に関する株主責任の実証研究」をテーマに講演をして頂いた後、全員によるディスカッションを通して、中国の改正された新しい会社法と証券法等の理解を深めることができた。また、学生からの質問に対して、逐一丁寧な説明や回答があり、学生たちには大きな収穫となり、大変、有意義な交流会となった。





【文学部】

2020年10月20日、ZOOMによるオンラインセミナーを実施した。吉林大学古籍研究所の崎川隆教授による「中国古文字学の魅力」と題する講演ののち、学生との全体ディスカッションを行った。中国古代の文字(漢字)に関して平易ながら学術的な議論が交わされ、また講演時間終了後も、中国で研究者となるキャリアや大学院の様子、日本との違いといったトピックについて学生からの質問が多数あり、崎川教授から長時間にわたって極めて実践的なアドバイスを受けることができた。



第二部：私の研究事例から

- 古文字学の主流ではない
- 文字・テキストの“物質性”
 - 物質/観念
字形、書式の変遷、縦書きと横書き、印刷複製、電子化
- 情報技術としての文字
 - 技術と社会と思考様式
記録、編集、管理、情報処理
文字・文書と官僚制



3. プログラムの成果

教育上の成果として本プログラムによる吉林大学でのセミナーに参加した学生がキャンパス・アジアの交換留学制度を利用して岡山大学に留学することを決めた点が挙げられる。また、他の参加学生の中でも、本プログラムで知り合った吉林大学生とWechatなどを用いて連絡を取り合うなど、継続的に国際交流また中国語利用の機会を得た点も、教育上の成果である。さらに研修終了後、留学生のチューターを志願した者もあり、本プログラムによって国際交流の重要性や喜びを実感したことが、具体的な行動に結びついている。2019年度の法・文学部合同実施では、多様な学生どうしの交流および協力、また歴史学と法学の学際的交流、各学部のプログラムで培った経験の融合といった面で大きな効果があった。

なお研究者間の交流は、岡山大学における国際シンポジウム開催という成果へと結びついた。2019年3月に「中国史の新史料と新視角」、2021年3月に「漢籍と中国史」と題して、吉林大学・成均館大学校の研究者を岡山大学に招聘して開催した(2021年はオンライン開催)。

② 自然科学系(吉林大学)派遣・受入プログラム

自然科学系では、吉林大学植物科学学院と4年間に渡り、ラボワークとフィールドワークを通して東アジアを中心に国際的に活躍できる人材の育成を目指し、3大学院博士前期課程・後期課程の学生の交流を双方向で実施する計画を立てた。年度ごとに行った交流について記載する。

1. 2017年度

2016年3月に岡山大学大学院環境生命科学研究科から副研究科長他4名で吉林大学農学部へ訪問し、環境系の学生交流について相談をし、2017年度から自然系大学院生の交流を始めた。

岡山大学からは、吉林大学の三大学交流フォーラム週間に合わせて、生物資源科学専攻と生物生産科学専攻の学生5名が、2017年10月10日から19日まで、吉林大学へ派遣された。これら5名の学生は、植物科学学院の3つの研究室に分かれて、植物科学に関わる実験を行った。

一方、吉林大学からは、植物科学院の学生5名が、2018年2月27日から3月7日まで、岡山大学に派遣された。これら5名の学生は、生物情報化学と作物開花制御学の2つの研究室に分かれて、農生命科学に関わる実験を行った。さらに、倉敷市にある資源植物科学研究所の見学を行い、世界的に有名な馬先生と話す機会も得た。

2. 2018年度

岡山大学からは、生物資源科学専攻の学生5名が、平成30年10月10日から19日まで、吉林大学へ派遣された。これら5名の学生は植物科学院と動物科学院の3つの研究室に分かれて、植物科学と動物科学に関わる実験を行った。

吉林大学からは、植物科学院の学生10名が、平成31年2月26日から3月7日まで岡山大学に派遣された。これら10名の学生は、天然物有機化学・生理活性化学・生物情報化学・野菜園芸学・作物学の5つの研究室に分かれて、農生命科学に関わる実験を行った。倉敷市にある資源植物科学研究所の見学を行った。さらに、科学技術を学ぶ社会見学として、宮下酒造を視察した。また、日本文化を学ぶ社会見学として、岡山城・後楽園・牛窓オリーブ園を訪問した。

3. 2019年度

岡山大学からは、生物資源科学専攻の学生5名が、2019年10月15日から24日まで、吉林大学へ派遣された。これら5名の学生は植物科学学院の3つの研究室に分かれて、植物科学と動物科学に関わる実験を行った。それぞれの研究室で、お互いの研究について議論した。また、日中の文化の違いについても話をし、交流を深めた。同時期に岡山大学の環境生命科学研究科教員が6名招聘されており、その講義を両大学の学生が聴講し、質疑応答を行なった。また、現地の文化を深めるため、浄月潭公園を訪問し、中国式の自然公園について勉強した。

吉林大学からは、大学院の植物科学学院と農学部からの交流があった。



植物科学学院については、植物科学学院の学生10名が、2020年2月25日から3月5日まで岡山大学に派遣され、これら10名の学生は、生理活性化学・生物情報化学・植物病理学・作物学の4つの研究室に分かれて、農生命科学に関わる実験を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染症のため、中止となった。交流をさらに深める機会であったが、残念であった。

吉林大学農学部については、2019年12月2日から12月6日まで5日間の日程で、吉林大学農学部から大学院進学を目指す学部生ら27名が岡山大学を訪問した。交流の一環として、日本の文化と科学技術を体験して、大学院進学後の日本留学・岡山大学留学への関心を高めてもらうための体験プログラムを吉林大学の引率職員1名と岡山大学の教員1名で本プログラムを実施した。

12月3日、日本で唯一の農学系の研究所である岡山大学資源植物科学研究所を訪問した。世界最先端の研究についての説明を受け、また、吉林大学出身の博士後期課程の学生さんや第一線の研究に取り組む教員と話す機会も設けた。12月4日は、京都大学農学部応用生命科学科を訪問し、応用生命科学科の概要ならびに植物栄養学に関わる研究についての説明を受け、研究室と研究圃場の見学をした。さらに鹿苑寺(金閣寺)を見学した。12月5日は、岡山大学農学部で大学院環境生命科学研究所の紹介を受け、研究科長と直接話をした。その後、山陽圏フィールド科学センター・研究現場・研究室の見学をした。その後、日本三名園の一つである岡山後楽園を見学し、やすらぎを得たのではないかと期待している。体験プログラムとしては、充実した(ぎっしり詰まった)ものであった。

4. まとめ

いずれの派遣においても、学生同士で、研究の進め方や研究環境の相違について議論をし、東アジアを中心に国境を越えて活躍できる優れた人材(アジアクラット)としての素養を付けることができた。

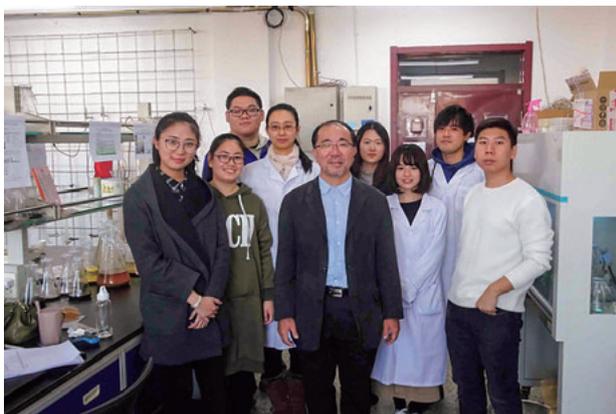


写真1. 吉林大学研究室にて(2018年10月)



写真2. 吉林大学図書館にて(2019年10月)



写真3. 吉林大学講義室にて(2019年10月)



写真4. 講義の様子(2019年10月)



写真5. 資源植物科学研究所にて(2019年12月)



写真6. ガラス室での説明(2019年12月)



写真7. 山陽圏フィールド科学センターにて(2019年12月)



写真8. 研究科長による説明(2019年12月)



③ 自然科学系(成均館大学校)派遣・受入プログラム

1. はじめに

SDGsへの貢献を目標に掲げ、教育・研究を進める本学にとって、エネルギー科学関連分野の人材育成は重要な課題である。2016年にパリ協定が発効して以降、温室効果ガスの削減が全人類を上げて取り組むべき課題となるなか、2020年10月には、菅総理が「2050年までに、温室効果ガスの排出を全体としてゼロとする、カーボンニュートラルを目指す」ことを宣言し、国際社会において我国の果たすべき役割が明確に示された。東アジア地域は、多くの人口を抱えるエネルギーの大消費地であり、国境を越えた共通の価値観の醸成と地球温暖化解決へ向けた協働が必要となっている。日中韓のCO2削減に関する2030年の目標値を比較すると、日本は、2013年比26%削減と、明確な削減目標を定めているのに対し、中国は、CO2削減率でGDP当たり60%減(2005年比)、韓国は、何も対策を講じなかった時の2030年の排出量に比べて37%減というように経済成長を優先させた目標設定となっており、この分野で、日本がリーダーシップを取ることで、カーボンニュートラルなグリーンエコノミーを東アジアから世界へ向けて発信することを可能とすることを目的とし、エネルギー科学分野やナノ材料科学分野において、世界トップレベルの教育・研究機関である成均館大学と、「人工光合成」をはじめとする光化学やナノ炭素材料科学分野に強みをもつ岡山大学との研究交流を通じ、太陽光エネルギーの利活用技術をはじめとする様々な低炭素関連技術開発や、共同研究を通じた大学院生の実践的な行動力と知性の涵養により、国際的なリーダーシップを発揮し、SDGsへと貢献する人材育成する体験型の研究交流プログラムを実施した。

2. 実施プログラムの内容

(1) 光機能材料ワークショップ[I](2018/7/17-25, 9日間)【成均館大学校→岡山大学】

成均館大学校から4名の大学院生と2名の教員が岡山大学を訪問し、岡山大学大学院環境生命科学研究科において実験研究を行った。また、途中、7/17, 18, 21には、コロキウムセッションを開催し、日本人教員9名、韓国人教員2名、韓国人学生4名、日本人学生4名が英語での発表および討論を楽しんだ。また、関連する研究を行っている大学院生を中心に、53名の参加者があった。

(2) 研究留学体験(2018/10/10-2018/12/12, 64日間)【岡山大学→成均館大学校】

岡山大学から大学院生1名が成均館大学校に留学し、成均館大学校エネルギー科学科の教員の指導のもとで、光機能性材料・光触媒に関する共同研究を行った。

(3) 光機能材料ワークショップ[II](2018/10/24-11/1, 9日間)【岡山大学→成均館大学校】

岡山大学から大学院生5名と教員2名が成均館大学校化学科およびエネルギー科学科を訪問し、共同研究テーマに関する英語での研究発表と討論を楽しんだ。10/30には「Sungkyunkwan University (SKKU) - Okayama University Joint Mini-Symposium」を成均館大学校化学科において開催し、日本人教員2名、韓国人教員4名、日本人学生5名、韓国人学生5名による研究発表会を開催した。さらに期間中、韓国光化

学会主催の国際会議(日韓先端光科学会議; KJFP2018)に参加し発表・討論を行い、日本からの参加学生のうち1名がポスター賞を受賞するなど、日韓の分け隔てなく、共同研究について話し合い、プロジェクトを進めるという体験を積んだ。

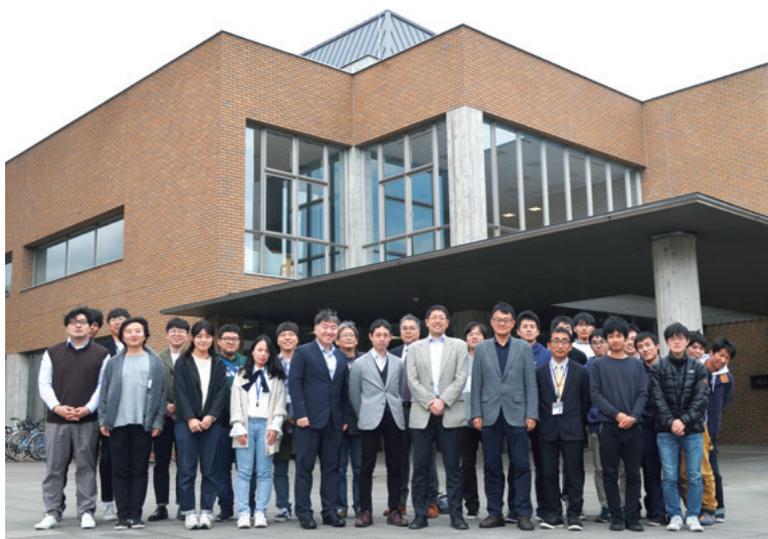


(4) 光化学セミナー(2019/2/20-21, 2日間)【成均館大学校→岡山大学】

成均館大学、および、韓国での共同研究パートナーである高麗大学から教員2名が岡山大学を訪問し、プログラム参加希望者向けに、韓国留学の意義と、成均館大学校で、どのような研究を行うことができるかを紹介するセミナーを開催した。岡山大学から34名の学生が参加し、英語での討論を行った。

(5) 光機能材料ワークショップ [Ⅲ](2020/11/18-27, 9日間)【成均館大学校→岡山大学】

成均館大学校から5名の大学院生と2名の教員が岡山大学を訪問し、岡山大学大学院環境生命科学研究科において実験研究を行った。共同研究実験では、韓国の学生や教員から、研究該当領域を異なった領域の観点からの実験を体験することで、先駆的、先端的研究を探求する上で重要な経験を積むことで、自由な発想を育むことのできる人材育成システムであったと高い評価を得た。途中、11/18, 25に



は、岡山大学50周年記念館中会議室にてコロキウムセッションを開催した。岡山大学からは、環境生命科学研究科、自然科学研究科、医歯薬学総合研究科、異分野融合コアから、日本人教員9名、学生12名(うち留学生2名)、韓国側は、教員2名、学生5名が英語での講演を行い、約60名の参加者をまじえ、英語での熱心な討論が行われた。交流が行われた研究分野は、化学全般にわたる領域のみならず、令和2年(2020年)は物理学、生物学、農学、工学、情報学、医学、薬学などへも幅が広がり、光を中心とした学理の追求のみならず、両国の個性のある研究取り組みの中から、個性的な連携・融合共同研究の芽が飛躍的に成長しうると期待される内容であった。



3. まとめ

以上のとおり、本プログラムにおいて、化学系大学院生を中心に、光化学および光機能材料を中心に、SDGSへの貢献を目指したエネルギー材料・触媒関係・光技術の共同研究をベースにした研究交流を実施した。共同研究をベースにすることで、岡山大学の学生が成均館大学校で、あるいは、成均館大学校の学生が岡山大学で実験を行うことができ、より実践的な知識と経験を得る効果が上がっていることが確認されている。プログラムに参加した学生は、相互訪問に参加した、15名のほか、研究交流会に参加した学生を含め、200名を超える日韓の学生に国際交流の機会を提供している。現在も、そうした交流が続いており、エネルギーに関する競争的な技術開発・研究の環境下で、競争と両国の個性を活かした幅広い連携・融合を両立させるような柔軟な協働体制の礎が確実に構築され、強固なものとなった。

また参加した博士前期課程の学生1名が、本プログラムへの参加をきっかけに、博士後期課程へ進学するなど、本学学生のグローバルな博士人材の育成・支援にも貢献しているほか、このプログラムをきっかけにスタートした国際共同研究は現在も続いており、今後も、こうした国際共同研究体制に基づく学生交流、および、それによる教育プログラムを継続することとしている。

④ 先端医療応用コース(医学系)受入プログラム

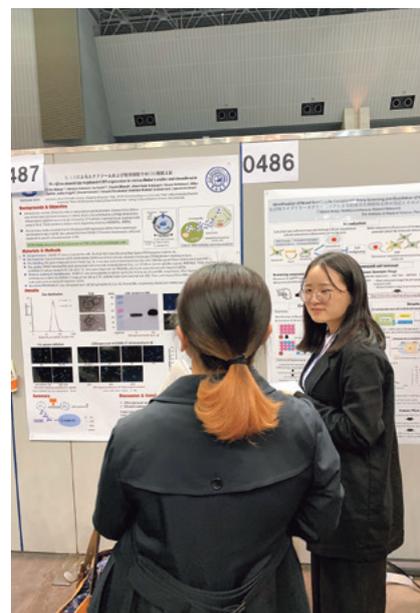
先端医療応用コース(医学系)受入プログラムでは、パイロットプログラムでは「ナノバイオコース(医学系)」として派遣及び受入による短期コースおよび病院での研修を含んだ長期コースといった、多様性を持った育成プログラムをとっていた。パイロットプログラムでの交流経験に基づく実績をベースに、第2期プログラムにおいては、高度専門人材育成を強く意識した先端医療応用コースをあらたに立ち上げた。

先端医療応用コースでは、博士課程前期学生を研究室に長期に受入れて最先端のテクノロジーを駆使した医学研究に取り組むプログラムを展開した。岡山大学において日本人大学院生とともに研究室で日夜研究に従事しつつ、日本文化にも大いに溶け込むことができ、研究成果とともに大きな収穫を得て帰国した後に、高度専門医療人として中国でアカデミックポジションを得るものも出てきたことから、中核的高度実践人＝アジアクラット育成プログラムとしての成果は大きいと考えられる。

ただし、令和2年度については渡日7日前に突然、中国からの渡航が禁止されてしまい、彼の積年の夢であった日本留学が実現できなかったことは残念極まりない。

1. 先端医療応用コース(医学系)受入プログラムの経緯

2016年7月に、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科長、岡山大学病院院長とともに、吉林大学第二病院を訪問した。建築中の新病院を視察するとともに、新病院設立に伴う若手医師の臨床研修や医学研究などについて、病院長や教授など教育スタッフと意見交換を行い、今後の中核的高度実践人のあり方について議論した。2017年3月には先端医療応用コース(医学系)受入プログラム開始に先立ち、吉林大学を訪問して医学部長と意見交換をおこない、具体的な対象学生やプログラム内容、さらにはダブルディグリーに必要な条件などについて議論をおこなった。先端医療応用コースは2017年10月に募集を開始した。応募学生に対してskypeで事前に面接をおこない、英語力や医学知識、研究に対する情熱などを評価して、合格者を2018年2月より11か月間受け入れた。



留学生が日本分子生物学会で発表

2. プログラム実績

2016年度：短期ナノバイオコース（医学系）受入	吉林大学4名
2017年度：短期ナノバイオコース（医学系）受入	吉林大学4名
2018年度：短期ナノバイオコース（医学系）受入	吉林大学5名
先端医療応用コース 受入	吉林大学1名
2019年度：先端医療応用コース 受入	吉林大学2名
2020年度：新型コロナウイルス感染拡大のため	渡航1週間前に中止が中国政府により決定。



3. 成果と今後の展望

先端医療応用コースの立ち上げによって、単なる施設見学や座学といった吸収型の学びから、長期に研究テーマをもって取り組むことでより専門性が高まった。先端医療応用コース学生は共著者も含めると、計8本の国内全国学会および海外学会での発表の成果をあげることができた。また1名は帰国後、中国でアカデミックポジションについており、中核的高度実践人として今後の活躍が期待される。

⑤ 先端医療応用コース(薬学系)派遣・受入プログラム

医歯薬系での第2期キャンパス・アジア(CA)プログラム事業として、岡山大学薬学部と成均館大学校薬学校(韓国)との間での双方向的な短期学生派遣・受入プログラムである先端医療応用コース(薬学系)(平成30年度までのナノバイオコースを薬学系に限定した実施形態に変更したプログラム)を実施した。ただし、令和2年度については、両大学の実施責任者間で協議し、世界的なCOVID-19感染拡大による両国間での移動の制限、および参加学生・帯同教員の安全確保のため、派遣・受入プログラムの実施を見送ることとなった。

本コースは、アジアの薬学教育をリードする日韓両国における薬学教育システムのそれぞれの長を理解し、併せて同世代の薬学生間の学生交流を通じた相互理解を目的としたプログラムとして、それぞれの休暇期間中に正規授業期間中の相手校への派遣を行うものである。



薬令市場(ソウル)でのフィールドワーク(派遣)

1. 派遣プログラム

派遣プログラム(6日間のプログラム)は、学生の訪問に合わせて成均館大学薬学校で設定した英語での薬学専門科目授業の聴講に加え、岡山大学の教員が成均館大学校薬学校の大学院特別講義として開講した英語授業への参加を中心に毎年度両大学でプログラムの詳細を協議し、実施している。期間中の週末は学生交流を主体としたプログラムを実施し、

ソウルとスウォンで新旧の韓国文化を日韓の学生で体験するプログラム(薬令市場(薬種市場)の見学や地域の薬局の訪問など)も組み込んでいる。派遣プログラムには薬学部教員が2名帯同することとし、参加学生には事前学習への参加と報告書の作成を課している。本プログラムは、薬学部学生には「特殊講義(国際連携薬学人材育成プログラム)」(2単位)として単位認定されている。

2. 受入プログラム

受入プログラム(9日間のプログラム)では、岡山大学の薬学系教員による医療薬学研究および基礎薬学研究の特別講義に加え、岡山大学医療教育センターでの高機能患者シミュレーターを用いた先端医療教育の体験を組み込んでいる。さらに、岡山大学グローバル人材育成院に所属する教員による日本を知るための講義やフィールドワークも実施している。日本文化の理解を深める試みとして、岡山城、後樂園、倉敷での自らの視点でフィールドワークを実施し、滞在期間中での成果発表を行うこととした。学生交流およびフィー



ルドワークの実施に際しては、成均館大学校薬学校への短期派遣プログラムに参加(平成29年～令和元年)した岡山大学薬学部学生の積極的な参加を求め、第1期のプログラムから継続して実施している学生同士の交流も継続して実施できるよう工夫した。

平成28年度(2017年2月実施)と平成29年度(2018年2月実施)の受入プログラムでは、事前に倉敷の近世都市形成に関する講義を行い、日本文化の理解を深め、併せて社会福祉に関する大原孫三郎の事績としての倉敷中央病院の見学をフィールドワークに組み込んだ。

平成30年度(2019年1月実施)の受入プログラムでは、平成30年7月豪雨水害の実情を知るためのフィールドワーク(倉敷市真備)と大規模災害時医療における薬剤師業務に関する講義・演習を組込むことにより、学生たちが国境を越えた医療教育や人材育成、社会制度や医療基盤の構築などの共通課題を意識し、各国の文化的背景の異同を自ら認識し、相互に将来へのビジョンについて意見を交換することを目指した。

令和元年度(2020年2月実施)の受入プログラムでは、新型コロナウイルスの感染拡大が懸念される最中でのプログラムであったので、岡山大学の国際感染症治療学分野教員をファシリテーターとして学生たちが国境を越えた医療教育や人材育成、社会制度や医療基盤の構築などの共通課題を自ら認識することを目指すグループディスカッションを組み込んだ。



高機能患者シミュレーションを体験(岡山大学医療教育センター)

3. プログラム実施概要

平成28(2016)年度

岡山大学学生の派遣(4名)は平成28年9月20日(火)～9月22日(木)の3日間の日程で、成均館大学校学生(9名)の受入は平成29年2月6日(月)～17日(金)の11日間の期間で実施した。

平成29(2017)年度

岡山大学学生の派遣(5名)は平成29年9月22日(金)～26日(火)の5日間の日程で、成均館大学校学生の受入(6名)は平成30年2月7日(水)～11日(日)の5日間の期間で実施した。

平成30(2018)年度

岡山大学学生の派遣(6名)は平成30年9月13日(木)～18日(火)の6日間の日程で、成均館大学校学生の受入(6名)は平成31年1月15日(火)～23日(水)の9日間の日程で実施した。



真備地区(倉敷)でのフィールドワーク(受入)

令和元(2019)年度

岡山大学からの学生の派遣(6名)は令和元年9月19日(木)～24日(火)の6日間の日程で実施し、成均館大学からの学生の受入(6名)は令和2年2月3日(月)～11日(火)の9日間の日程で実施した。

令和2(2020)年度

COVID-19感染拡大により派遣・受入プログラムの双方の実施を見送った。

4. 派遣・受入プログラムの成果

第1期のナノバイオコースで岡山大学を訪問した成均館大学校薬学校大学院学生(1名)が平成29年10月に岡山大学の大学院医歯薬学総合研究科博士後期課程(薬学系)のダブル・ディグリーコースに入学したことは特筆すべき成果である。この学生は既に成均館大学の大学院を修了し、博士学位を取得している。令和2年9月に岡山大学の大学院を単位取得満期退学し、両大学の指導教授のもとで博士論文の提出に向け準備を進めている。



3) 東アジア・リーダーシップ論・学生フォーラム

「東アジア・リーダーシップ論」は、東アジア高等教育圏を見据えた中核的高度実践人＝アジアクラット育成プログラムの名のもとに、2017年度より開講したキャンパス・アジアの必須科目である。

この必須科目授業は、将来の東アジアを産官学各分野で中核的なポジションでリーダーシップをとれる人材育成を目的に、リーダーシップ論を中心に、人文・社会学系、自然科学系、医歯薬学系の分野の教員が、それぞれの分野で東アジアに共通する問題や課題についてオムニバス形式講義を行った。また、この講義の最終回には、学生フォーラムによる学生発表を課しており、毎回、岡山大学で学んだ吉林大学、成均館大の留学生は「持続可能な地域作りとリーダーシップ」というテーマで、また、両大学に留学した岡山大生は「留学を振り返って： 私にとっての『東アジアにおける高度実践人』とは」というテーマで発表を行った。

「東アジア・リーダーシップ論」は、開講当初は、吉林大学、成均館大から派遣されてきた留学生のため科目として開設・実施されたが、2019年度の後半期からは、キャンパス・アジアプログラムに参加し留学する、あるいは、留学した日本人学生が参加し、3校コンソーシアム参加学生が、相互に交流し合える機会となるように体制を整えた。

また、留学生、日本人学生の双方から『アカデミックな議論を通じて交流を持ちたい』という声が上がったことから、両者の交流を促すために、岡山大学International Student Associationに所属する日本人学生もクラスに合流し、延べ12名が参加し、授業担当教員の指導のもと、活発なディスカッションを行い、日中韓の学生が知的なレベルで交流する機会が生まれた。

よって、この「東アジア・リーダーシップ論」は、2020年度からは、短期プログラムの岡山大学派遣学生も必修とする予定であったが、新型コロナウイルス感染症の国際的な蔓延によって、学生の物理的な移動が停止されてしまったために、この科目の開講も中止に追い込まれてしまったことは、非常に残念なことであった。しかし、この科目設置の経験から、2020年度のオンラインによる三大学共同教育の発想や、オンライン・アカデミックセミナーに結びついたことは、言うまでもない。



学生フォーラムで発表に聴き入る日中韓の学生たち



発表「東アジアにおける高度実践人とは」

以下に、この「東アジア・リーダーシップ論」のシラバスを掲載しておく。

授業科目	東アジア・リーダーシップ論
担当教員(所属)	神原 信幸 他
学期	Q:2、4学期
曜日・時限	木曜日/7・8時限
単位数	1
科目区分	キャンパス・アジア必修科目
対象学生	1～4年、大学院生
必修・選択の別	選択必須
連絡先	神原 信幸 グローバル人材育成院 086-251-7476 kambara@okayama-u.ac.jp
オフィスアワー	木 13:30～15:00 (又は事前予約)
使用言語	英語・日本語
授業の概要	本講義では、国連「持続可能な開発目標(SDGs)」を念頭に、また岡山の地域性を踏まえ、東アジアにおける日中韓の相互関係性を取り上げる。人文社会を中心に、自然科学、医歯薬の視点も加え、東アジアにおける持続可能な発展に向けた現状と課題を検討する。包括的、学際的、多面的な知識の習得を通して、将来における日中韓の関係と大学、行政、企業、NPO等の組織及びリーダーの役割について考察する。
学習目的	次世代のリーダーに必要な地域的・国際的視野を持ち、日中韓に共通する、また共有する課題について、柔軟に思考し議論する力を身につける。
到達目標	日中韓各国や地域の特性と、東アジアから世界につながる国際的な視野持ち、各人の専門分野から、将来の日中韓の持続的な発展に向けての提言を行える。
授業計画	本講義は、関係学系の教員によるオムニバス形式で行われる。 1. オリエンテーション 2. 東アジアの歴史と文化 3. 東アジアの経済交流 4. 東アジアの自然と農業 5. 東アジアの社会課題 6. 東アジアの医学、薬学、保健 7. 東アジアにおけるリーダーに向けて 8. まとめ
授業時間外の学習(予習・復習)方法(成績評価への反映についても含む)	国連「持続可能な開発目標(SDGs)」を外務省等のホームページよりダウンロードし、17の開発目標を理解しておくこと。
授業形態	(1)割合 講義形式:40% 講義以外(学生との対話、アクティブラーニング等) 60% (2)講義形式以外の内容 ディスカッション あり グループワーク あり プレゼンテーション あり 学内実習・実験 あり 学外実習 あり その他: (3)履修者への連絡事項 講義は英語及び日本語で行います。



使用メディア・機器	DVDを使用、スライドあり、板書あり
教科書	ハンドアウトを使い授業を行う
参考書等	パワーポイントのスライドおよび参考資料を配付する。
成績評価	授業への参加:50% 演習:20% 課題:30%

4) 三大学共同教育

COVID-19パンデミックの影響を受け、キャンパス・アジア事業における国際交流も2020年2月から、完全に停止状況に陥ってしまった。このような状況の中で、コンソーシアム大学各校は、2020年7月末に、オンライン上で三大学会議を開催した。会議の中心課題として、物理的に学生が国境をまたぐ国際交流が叶わない中で、インターネットを活用した新たな国際交流の手段と方法に焦点があてられた。岡山大学をはじめ、吉林大学、成均館大学校とも、リモート教育については手探りな状態にある中で、各大学が関心のある分野やトピックにもとづいたアカデミック・セミナーをオンライン上で開講し、各大学で関心のある教職員、学生、関係者が聴講可能とすること、また、パイロット事業としてオンライン科目を少数でも構わないから、実施することで話がまとまった。

吉林大学側からは、COVID-19に関係する、社会科学、保健衛生学系についてアカデミックセミナーのシリーズが、Opportunities and Challenges in Post Epidemic Era と題して、2020年11月から10回にわたって提供されることとなった。以下に、そのプログラム一覧を掲載する。



Opportunities and Challenges in Post Epidemic Era

Time	Name	Title
November 11th 19:00-20:00	WANG Da	《The Wave of Global FinTech Innovation and China's Latest Practice》
November 16th 19:00-20:00	DING Yibing	《Post-Pandemic International Trade and Global Value Chains》
November 17th 16:00-17:00	XUAN Chunji	《Changes in the GVC and Cooperation in Northeast Asia in the Post-pandemic Era》
November 19th 16:30-17:30	GUO Yingtong	《How should China respond to the impacts of Covid-19: a sectoral structure perspective》
November 20th 16:00-17:00	Wonbin Cho	《Covid-19 and Democracy in the Republic of Korea》
November 24th 19:00-20:00	WEN Shuangge	《The Regulatory Perspective of the Corporate Objective Debate - Reconciling Conflicts between Shareholders and Stakeholders》
November 25th 19:00-20:00	ZHANG Yanzhe	《Globalization, vs Anti-globalization in the Post-COVID 19 Era》
November 26th 19:00-20:00	YANG Shuman	《Public Health Needs You and Me》
November 27th 19:00-20:00	ZHAO Yang	《The Impact of the Epidemic on China's Urbanization and Real Estate Market》
TBA	Alex Taek-Gwang Lee	《Two Perspectives on the COVID-19 Pandemic: Agamben vs. Zizek》

受講申込方法：※事前申し込みが必要です。詳細は、下記URLにて確認下さい。
URL：<http://campus-asia.ccsv.okayama-u.ac.jp/?p=5628&preview=true>

★現在、JASSO海外留学支援制度奨学金に、キャンパス・アジア事業による派遣留学生に対する奨学金を申請中です。本事業が採択された場合、奨学生の推薦は、本セミナー受講者を優先します。（なお、JASSO奨学生の推薦には、他にも成績要件（成績評価係数2.3以上）等の条件があります。）



岡山大学側からは、2021年の1月からJapan X SDGs Virtual Global Circuit Academic Seminarシリーズとして、日本文化や国連の持続可能な発展目標に関連するテーマを主題にしたオンライン講演会を提供した。

Okayama University Japan x SDGs Virtual Global Academic Seminar

	講演タイトル	主催者
1	A Farm Story: How our Small-scale Organic Vegetable Farm Plays a Role in Supporting the UN's SDGs	岡山大学
2	Localizing and Partnering for the SDGs: Issues and Opportunities for an Aging Society	岡山大学
3	Sustainability & Social Impact In Japan: How We Can Do Good, Better	岡山大学
4	Human and Planetary Health: Toward Shared Responsibility and Global Solidarity in the Anthropocene	岡山大学
5	Beginning Global Citizenship Education with Anti-Oppressive Education	岡山大学
6	A Monk's Story: How Buddhism Influences my Life Choices and Permeates Japanese Culture	岡山大学
7	Mark of the Yakuza or Traditional Culture? Reconsidering the Japanese Tattoo (How We Know What We Think We Know)	岡山大学
8	Japanese Pop-Culture	岡山大学
9	Textile Arts and Japan	岡山大学
10	Intercultural Competence from a Sociolinguistic Viewpoint: How shall we reconnect people around the world?	岡山大学
11	What can Buddhists Teach Us about Sustainability?	岡山大学
12	COVID-19 and Public Health Policies in Japan	岡山大学
13	The Role of Humor in Foreign Language Education and Cross-Cultural Communication	岡山大学
14	Environmental Philosophy in a Comparative Context	岡山大学
15	Current Conditions and Situations on Technology Innovation and Entrepreneurship in Silicon Valley, US, and Future After the COVID-19 Pandemic	岡山大学

また、岡山大学は、グローバル人材育成院の神原信幸教授が、岡山大学(1名)、吉林大学(12名)、成均館大学校(3名)の学生を対象に、「日本学入門」、「比較教育学入門」(各8回の授業)の集中オンライン科目を提供した。以下に、それぞれの科目のシラバスを掲載する。

Okayama University 2021 Spring: Introduction to Japanology

Institute of Global Human Resource Development
E-Learning: Eight (8) modules; One (1) Undergraduate Credit

Instructor

KAMBARA, Nobuyuki, Ph.D., Professor

SDGs Goal(s)



Contact:

E-mail: kambara@okayama-u.ac.jp, Tel. 81-(0)86-251-7476, Office: #225, Faculty of Letters, Law, and Economics Building No.2

Office Hour

Wednesday 14:00 - 16:00, or by appointment

Medium Language of Instruction

English

Outline of the Course

This course is open to students from Okayama University and students from prominent partner institutions.

This course offers an introductory survey of the diversity of Japanese society from a sociological perspective. Several aspects of contemporary Japanese history will be covered, drawing on knowledge from research in Japanese history, education, and literature, as well as from the various social sciences. The course revolves around three broad issues that provide an underlying thematic coherence and that demonstrate how sociologists approach a society of such complexity and depth:

- A) What makes Japan a recognizable cultural and social entity? What cultural idioms and social institutions are distinctive, salient features of Japan? How can we talk about the "distinctiveness" of Japan without falling into the common trap of attributing a "uniqueness" to Japan?
- B) What has been the course of social and cultural change in modern Japan? How are Japan's present patterns continuous or discontinuous with its past? What are the cultural politics of tradition?
- C) Japanese society is undergoing profound change as new social actors appear among the generations. What new social formation is replacing patterns of life that characterized Japan in the



late twentieth century?

This intensive course is designed to offer an opportunity for both students from Okayama University's partner institutions and Okayama University to virtually study together and to have discussions on topics of the course contents.

Under the instructor's supervision, students are expected to form multinational teams to carry out group research and make presentations at the last meeting.

Objectives

To understand social institutions and social issues within contemporary Japanese society. To analyze and discuss the Japanese social agenda put forth in newspapers and mass media. To discuss and collaborate with students from other countries.

Targeted Learning Outcomes

Students should be able to:

To understand the culture, society, and people of Japan.

To explain the culture and society of Japan based on students' learning.

In the final session, students will present group research projects (in groups of mixed nationality) on topics approved by the instructor. In addition to demonstrating the ability to formulate a good researchable topic or question, gather relevant material, and present a clear and logical argument examining ideas and evidence, students should also demonstrate a good understanding of issues covered in the weekly discussions.

Additional short essays may be required during the semester.

Schedule

1. February 16 (Tuesday), 2021, Zoom meeting (17:00 - 19:00 JST)

Orientation: Planning Your Study of Japan

- (a) Students' self-introduction presentations (Each student has 3 minutes)
- (b) Read the article: "Communication and Culture: The Voice and Echo" In Introduction to Intercultural Communication." In Samovar, L.A., Porter, R. E. & McDaniel E.R. (Eds.), 2007, Communication Between Cultures. United States: Wadsworth.
- (c) Assignment #1: Discussion in Moodle

2. February 22 (Tuesday), 2021 (Asynchronous)

Characteristics of Japanese Culture Put Forth in the Genre Known as Nihonjin Ron

- (a) Read the article: Harumi Befu. 2001. "Premises, Models, and Ideologies." In "Hegemony of Homogeneity: An Anthropological Analysis of Nihonjin Ron" (pp. 66-85). Melbourne, Australia: Trans Pacific.
- (b) Assignment #1: Discussion in Moodle

3. February 26 (Friday), 2021 (Asynchronous)

Issues on Social Class and Education in Japan.

- (a) Read the article: Kariya, Takehiko. 2010. "From Credential Society to "Learning Capital" Society: a Rearticulation of Class Formation in Japanese Education and Society." In Ishida, Hiroshi and David H. Slater (Eds.) Social Class in Contemporary Japan: Structures, Sorting and Strategies (pp.87-113). New York: Routledge.
- (b) Assignment #2: Discussion in Moodle

4. March 4 (Thursday), 2021 (Asynchronous)

Issues on Employment in Japan

- (a) Read the Article: Kingston, Jeff. 2013. "Jobs at Risk." In Kingston, Jeff (Ed.) Contemporary Japan: History, Politics, and Social Change since the 1980s (pp.77-92). Malden, MA: John Wiley & Sons
- (b) Assignment #3: Discussion in Moodle

5. March 10 (Wednesday), 2021 (Asynchronous)

Gender Issues

- (a) Read the article: North, Scott. 2009. "Negotiating What's 'Natural': Persistent Domestic Gender Role Inequality in Japan." Social Science Japan Journal 12 (1): pp. 23-44.
- (b) Assignment #4: Discussion in Moodle

6. March 16 (Tuesday), 2021 (Asynchronous)

Minority Issues in Japan

- (a) Read the article: Cleveland, Kyle. 2014. "Hiding in Plain Sight: Minority Issues in Japan." In Kingston, Jeff (Ed.) Critical Issues in Contemporary Japan. Routledge.
- (b) Assignment #5: Discussion in Moodle

7. March 22 (Monday), 2021 (Asynchronous)

Pop-Culture Diplomacy

- (a) Read the article: Iwabuchi, Koichi. 2015. "Pop-culture Diplomacy in Japan: Soft Power, Nation Branding and the Question of 'International Cultural Exchange'." International Journal of Cultural Policy, 2015 Vol. 21, No. 4, pp.419-432.
- (b) Assignment #5: Discussion in Moodle

8. March 29 (Monday), 2021. Zoom meeting (17:00 – 19:00 JST)

Students' Presentations
Wrap-up

How to Learn this Course

First of all, this is an online course that will be conducted using Moodle, the Okayama University learning management system. All students from overseas partner institutions will be provided their own individual ID and password to log in.

<https://moodle.el.okayama-u.ac.jp/>

You are expected to read all of the required articles and to actively participate in the discussion forums in Moodle.

During the first meeting, students will be divided into four mixed-nationality groups to prepare their final group presentations. Students are expected to collaborate on this presentation together. For preparation, students should communicate together through e-mail, social networking, or other means to maintain communication with other students.

Note 1: This course is a special intensive course. Although major lessons will be asynchronous, students must follow and keep current with the course schedule.

Note 2: There will be two synchronous (live) Zoom meetings. The indicated time of meetings will be based on Japan Standard Time (JST). Zoom meeting information will be provided in Moodle. All registered students must check the course and zoom meeting information at least the day before the first class meeting.

Note 3: This course is intended for four (4) Japanese, four (4) Chinese, and four (4) Korean students, in order to offer a meaningful learning experience for a blended student body. Additional



students from other countries may be welcome if space is available.

Please contact the instructor immediately in case of trouble accessing Moodle or class materials.

Grading Policy

Discussion: The instructor will explicitly specify how many minimum posts each student is required to make for each discussion module in Moodle. Extra posts (beyond the minimum number of posts) will be counted as extra points toward the final grade. The instructor will provide a rubric assessment guideline concerning the quality of posts.

Final Group Presentation: The presentation topic must be agreed upon by the instructor by March 4. The instructor will provide a rubric assessment guideline concerning the quality of presentations.

Peer Evaluation: At the end of this intensive course, students must evaluate each other and how much each contributed to the group work. The instructor will provide a rubric assessment guideline.

Total Grade = Discussion (50%) + Final Group Presentation (30%) + Peer Evaluation (20%)

Prerequisites

In order to register for this course, students must pledge not to drop out during the middle of the course without a justifiable reason and that they have sufficient English proficiency in reading, writing, and speaking for the course assignments. A minimum score of TOEFL 500 (PBT), TOEFL 61 (iBT), or equivalent, is a must.

Okayama University

2021 Spring: Introduction to Comparative Education

Institute of Global Human Resource Development
E-Learning: Eight (8) modules; One (1) Undergraduate Credit

Instructor

KAMBARA, Nobuyuki, Ph.D., Professor

SDGs Goal(s)



Contact:

E-mail: kambara@okayama-u.ac.jp, Tel. 81-(0)86-251-7476, Office: #225, Faculty of Letters, Law, and Economics Building No.2

Office Hour

Wednesday 14:00 - 16:00, or by appointment

Medium Language of Instruction

English

Outline of the Course

This course is open to students from Okayama University and students from prominent partner institutions.

The purpose of this course is to review the development and major issues of comparative education. The course will emphasize theories which have grown out of the work of scholars and have influenced educational policy makers, school administrators, and educators. In each class, a major topic in comparative education will be covered. Students will be required to participate in rigorous intellectual discussions about comparative education.

In order to register this course, students must pledge not to drop out during the middle of this course without a justifiable reason, and that they have sufficient English proficiency in reading, writing, and speaking for the course assignments. A minimum score of TOEFL 500 (PBT), TOEFL 61 (iBT), or equivalent, is a must.

Objectives

This course has two goals. First, it will provide students with some of the information and concepts necessary for comparing different school systems, educational outcomes, and students' own educational contexts. Second, students should be able to form judgments about which aspects of a nation's educational system and policies are unique to a particular context and which aspects represent features generally found in schools throughout the world.

Targeted Learning Outcomes

In the final session, students will present group research projects on topics approved by the instructor. In addition to demonstrating the ability to formulate a good researchable topic or question, gather relevant material, and present a clear and logical argument examining ideas and evidence, students should also demonstrate good knowledge of theory areas in comparative education covered in the weekly discussions. Additional short essays may be required during the semester.



Schedule

1. February 15 (Monday), 2021, Zoom meeting (17:00 ~ 19:00 JST)

Introduction

- (a) Overview of the course, syllabus, requirements, and expectations
- (b) Why study education comparatively?
- (c) Why is the study of comparative education useful for society and you?
- (d) Self-Introductions (Each student has 3 minutes.)
- (e) Japanese elementary education (a movie)
- (f) Assignment #1: Discussion in Moodle

2. February 18 (Thursday), 2021 (Asynchronous)

Modern Education System 1 (Basic Education)

- (a) Historical review of six core nations' educational development. One required reading:
William K. Cummings. 1997. "Patterns of Modern Education." In William K. Cummings & Noel F. McGinn (Eds.) *International Handbook of Education and Development* (pp.63-86). New York: Pergamon.
- (b) Assignment #2: Discussion in Moodle

3. February 24 (Wednesday), 2021 (Asynchronous)

Modern Education System 2 (Higher Education)

- (a) Development of modern higher education in the world. One Required reading: Philippe G. Altbach, 1991, "Patterns in Higher Education Development: Towards the Year 2000." *Prospects*, Volume 21, pp.189-203.
- (b) Study life at a university
- (c) The impact of COVID-19 on higher education
- (d) Assignment #3: Discussion regarding your university educational experience (based on the required reading) and COVID-19 in Moodle

4. March 1 (Monday), 2021 (Asynchronous)

Functionalism Perspective: Theory, Policy, and Problems

- (a) Two required readings:
"The Functionalist Perspective on Schooling," & "Functional Theory, Policy, and Problems."
In Walter Feinberg & Jonas F. Soltis (Eds.) *School and Society* (pp.15-36). New York: Teachers College Press, Columbia University.
- (b) A movie
- (c) Assignment: Essay and discussion forum #4

5. March 5 (Friday), (Asynchronous)

Marxism, Reproduction Theory and Hidden Curriculum

- (a) Two required readings "Marxist Theory and Education," & "The Hidden Curriculum Revisited." In Walter Feinberg & Jonas F. Soltis (Eds.) *School and Society* (pp.15-36). New York: Teachers College Press, Columbia University.
- (b) Short movies
- (c) Assignment #5: Discussion in Moodle

6. March 11 (Thursday), (Asynchronous)

Student Achievement

- (a) One required reading: Krisztian Szell. 2013. "Factors Determining Student Achievement." *Hungarian Educational Research Journal*, Vol. 3(3), pp.55-66.
- (b) A movie
- (c) Assignment #6: Discussion in Moodle

7. March 17 (Wednesday), (Asynchronous)

Education and International Development

- (a) One required reading: Joseph P. G. Chimombo. 2005. "Issues in Basic Education in Developing Countries: An Exploration of Policy Options for Improved Delivery." *Journal of International Cooperation in Education*, Vol.8, No.1, pp.129-152.
- (b) A movie
- (c) Assignment #7: Discussion in Moodle

8. March 25 (Thursday), Zoom Meeting (19:00 – 21:00 JST)

- Students' Presentations
- Wrap-up

How to Learn this Course

First of all, this is an online course that will be conducted using Moodle, the Okayama University learning management system. All students from overseas partner institutions will be provided their own individual ID and password to log in.

<https://moodle.el.okayama-u.ac.jp/>

You are expected to read all of the required articles and to actively participate in the discussion forums in Moodle.

During the first meeting, students will be divided into groups to prepare their final group presentations. Students are expected to collaborate on this presentation together. For preparation, students should communicate together through e-mail, social networking, or other means to maintain communication with other students.

Note 1: This course is a special intensive course. Although major lessons will be asynchronous, students must follow and keep current with the course schedule.

Note 2: There will be two synchronous (live) Zoom meetings. The indicated time of meetings will be based on Japan Standard Time (JST). Zoom meeting information will be provided in Moodle. All registered students must check the course and zoom meeting information at least the day before the first class meeting.

Note 3: This course is intended for four (4) Japanese, four (4) Chinese, and four (4) Korean students, in order to offer a meaningful learning experience for a blended student body. Additional students from other countries may be welcome if space is available.

Please contact the instructor immediately in case of trouble accessing Moodle or class materials.

Grading Policy

Discussion: The instructor will explicitly specify how many minimum posts each student is required to make for each discussion module in Moodle. Extra posts (beyond the minimum number of posts) will be counted as extra points toward the final grade. The instructor will provide a rubric assessment guideline concerning the quality of posts.

Final Group Presentation: The presentation topic must be agreed upon by the instructor by March 4. The instructor will provide a rubric assessment guideline concerning the quality of presentations.

Peer Evaluation: At the end of this intensive course, students must evaluate each other and how much each contributed to the group work. The instructor will provide a rubric assessment guideline.



Total Grade = Discussion (50%) + Final Group Presentation (30%) + Peer Evaluation (20%)

Prerequisites

In order to register for this course, students must pledge not to drop out during the middle of the course without a justifiable reason and that they have sufficient English proficiency in reading, writing, and speaking for the course assignments. A minimum score of TOEFL 500 (PBT), TOEFL 61 (iBT), or equivalent, is a must.

4 | 今後の展望

第2期事業の最終年度である2020年秋季には、コンソーシアムを形成している吉林大学と成均館大学校の関係者が岡山大学において一堂に会し、外部有識者を交えてこれまでのキャンパス・アジア事業の振り返りと、補助事業終了後の今後の指針を協議することを目的としたシンポジウムの開催を計画していた。しかし、残念ながらコロナ禍でシンポジウムを中止せざるを得なかった。そこで、コンソーシアムでオンライン合同会議を開催し、キャンパス・アジア第2期事業の総括と後続プログラムである第3次キャンパス・アジア事業(第3モード)への申請を見据えた協議を行った。その結果、国連が提唱している「持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)」に関する社会的課題への貢献を基本方針とし、3ヵ国+ASEAN大学連合での貢献というストーリーで第3次事業へ申請することで合意がなされた。コンソーシアム3大学をコア大学と位置づけ、ASEANの大学をサテライト大学と位置づけることによって、ASEANの大学に参加しやすい環境を作り、本事業で獲得した成果の拡大を図ることになる。

2016年度より始まったキャンパス・アジア第2期事業では、パイロット事業の成果を基に、教育の質の保証を高め、次世代中核的専門職業人(アジアクラット)の育成を目指した。2017年のキックオフミーティングにおいて議論された方向性から、共同教養教育を踏まえた専門教育への連携強化に向けて、質の保証に基づいた交流事業(研究科交流プログラム、学術・交流プログラム、語学研修、半年から1年間の交換留学、ダブルディグリーの制度化)を進めてきた。特に、大学院教育交流の充実に向けて、人文・社会学系、自然科学系、医歯薬学系の全学レベルにおいて事業を推進するための長期・短期のプログラム開発を進めている。さらに、「大学の世界展開力事業」を基盤として、コンソーシアムの長期的なパートナーシップを築き、国内外でのネットワークづくりを視野に入れている。今後もこのような知見を活用して事業の拡大を目指す。

岡山大学が全学の戦略として進めているSDGsは、これからのキャンパス・アジア事業においても、アジアクラット育成に向けての重要な方向性を示しており、経済、社会、環境のバランスの取れた発展を考え、過去から現在、そして未来に向けた学びを深めていく必要がある。また、知識と技術の習得と共に、コミュニティから職場、国際関係に至るまで、社会の様々な場面で実践できるようにプログラム開発を進めていく。特に学生のモビリティを高めるため、本学からの派遣学生には、語学学習を中心としたマルチリンガルへの対応準備、帰国後の進学、就職を見据えた留学相談などの支援を強化する。



キャンパス・アジア事業推進者等

キャンパス・アジア事業推進代表者

榎野 博史	2017. 4～現在	学長
森田 潔	2016. 10～2017. 3	学長

キャンパス・アジア事業推進責任者

木村 邦生	2019. 4～現在	副学長(国際担当)、グローバル人材育成院長
村田 芳行	2018. 4～2019. 3	グローバル・パートナーズ センター長
神崎 浩	2017. 4～2018. 3	理事・副学長(国際担当)
荒木 勝	2016. 10～2017. 3	理事・副学長(社会貢献・国際担当)

キャンパス・アジアワーキング委員等

神原 信幸	2018. 7～現在	グローバル人材育成院 教授
岡村 裕彦	2020. 4～現在	大学院医歯薬学総合研究科(歯) 教授
土口 史記	2018. 4～現在	大学院社会文化科学研究科(文) 准教授
張 紅	2018. 4～現在	大学院社会文化科学研究科(法) 教授
滕 鑑	2020. 7～現在	大学院社会文化科学研究科(経) 教授
谷口 雅治	2020. 4～現在	大学院自然科学研究科 教授
廣畑 聡	2016. 10～現在	大学院保健学研究科 教授
高口 豊	2018. 4～現在	大学院環境生命科学研究科(環) 准教授
後藤丹十郎	2018. 4～現在	大学院環境生命科学研究科(農) 教授
黒崎 勇二	2017. 4～現在	大学院医歯薬学総合研究科(薬) 教授
出村 和彦	2018. 4～現在	大学院ヘルスシステム統合科学研究科 教授
陳 南澤	2018. 4～現在	全学教育・学生支援機構 教授
孫 路易	2018. 4～現在	全学教育・学生支援機構 准教授
海野 嶺	2019. 10～現在	大学院社会文化科学研究科 附属国際連携推進センター コーディネーター
延味 能都	2016. 10～2018. 3	大学院社会文化科学研究科(文) 教授
村田 芳行	2016. 10～2019. 3	大学院環境生命科学研究科(農) 教授
田口 雅弘	2016. 10～2018. 3	大学院社会文化科学研究科(経) 教授
土屋 洋	2016. 10～2018. 3	大学院社会文化科学研究科(文) 准教授
大安 喜一	2016. 10～2018. 6	グローバル・パートナーズ 教授
岡田 耕三	2018. 2～2019. 3	大学院自然科学等研究科(理) 教授
稲益 智子	2018. 12～2019. 8	大学院社会文化科学研究科 附属国際連携推進センター コーディネーター
上田 均	2019. 4～2020. 3	大学院自然科学研究科(理) 教授
佐藤 淳平	2019. 4～2020. 6	大学院社会文化科学研究科(経) 講師

執筆者一覧

木村 邦生	岡山大学副学長(国際担当)、グローバル人材育成院長
神原 信幸	グローバル人材育成院 教授
岡村 裕彦	大学院医歯薬学総合研究科(歯) 教授
土口 史記	大学院社会文化科学研究科(文) 准教授
張 紅	大学院社会文化科学研究科(法) 教授
廣畑 聡	大学院保健学研究科 教授
高口 豊	大学院環境生命科学研究科(環) 准教授
後藤丹十郎	大学院環境生命科学研究科(農) 教授
黒崎 勇二	大学院医歯薬学総合研究科(薬) 教授
陳 南澤	全学教育・学生支援機構 教授
孫 路易	全学教育・学生支援機構 准教授



CAMPUSAsia

Asiancrats: A Prime Professional Human Resource Development Program
for the East Asian Higher Education Area

岡山大学キャンパス・アジア 第2期事業総括成果報告書

CAMPUS Asia Final Report 2016-2020 Okayama University

2021年3月吉日発行

発行 岡山大学グローバル人材育成院 キャンパス・アジア事務局

〒700-8530 岡山市北区津島中2丁目1番1号

TEL 086-251-8532

<http://campus-asia.ccsv.okayama-u.ac.jp>

印刷 株式会社中野コロタイプ

岡山大学キャンパス・アジア第2期事業総括成果報告書 正誤表

P18 5) 学生交流実績
別紙1に差し替え

P20 ③成均館大学校冬期受入プログラム
2020年度参加人数
(誤)20人 → (正)14人

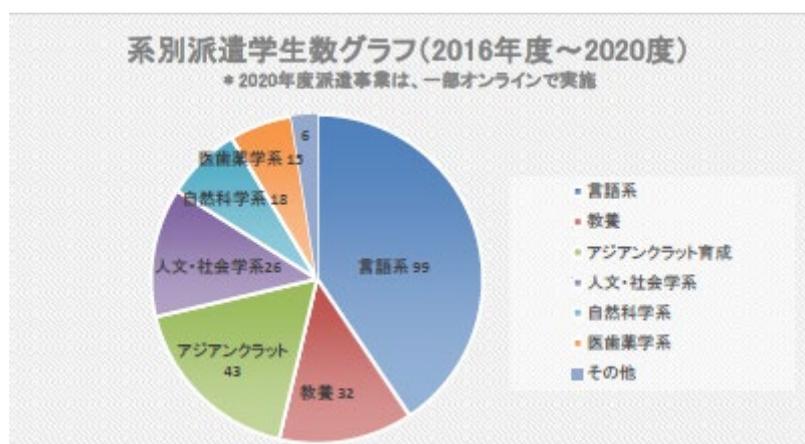
5) 学生交流実績

派遣プログラム

年度	プログラム名	プログラム実施期間	性別		所属		総計
			男	女	学部	大学院	
平成28年度 (2016年度)	言語系中国語・中国文化短期留学(吉林大学)	2016.7.31~8.13	7	4	10	1	11
	言語系韓国語・韓国文化短期留学(成均館大学校)	2016.7.31~8.23	0	12	12	0	12
	長期交換留学(吉林大学)	2016.10~2017.1	1	1	2	0	2
	長期交換留学(成均館大学校)	2016.10~2017.2	1	3	4	0	4
	CA中韓ワークショップ(中国・韓国)	2017.2.19~3.1	1	16	17	0	17
	自然科学系ワークショップ(吉林大学)	2017.3.15~3.18	0	3	0	3	3
	小計		10	39	45	4	49
平成29年度 (2017年度)	長期交換留学(吉林大学)	2017.3~2018.1	3	2	5	0	5
	長期交換留学(成均館大学校)	2017.3~2018.2	0	3	2	1	3
	言語系韓国語・韓国文化短期留学(成均館大学校)	2017.8.8~8.24	1	11	12	0	12
	言語系中国語・中国文化短期留学(吉林大学)	2017.8.13~8.26	5	4	8	1	9
	医歯薬学系・先端医療応用コース(成均館大学校)	2017.9.22~9.26	3	2	5	0	5
	自然科学系・人文・社会学系ジョイントワークショップ(吉林大学)	2017.10.10~10.19	5	1	0	6	6
	CA中韓ワークショップ(中国・韓国)	2018.3.6~3.16	5	10	14	1	15
	小計		22	33	46	9	55
平成30年度 (2018年度)	長期交換留学(吉林大学)	2018.3~2019.1	2	4	6	0	6
	長期交換留学(成均館大学校)	2018.3~2019.2	1	8	8	1	9
	言語系韓国語・韓国文化短期留学(成均館大学校)	2018.8.9~8.21	0	12	12	0	12
	人文・社会学系ワークショップ(吉林大学)	2018.9.3~9.10	0	2	0	2	2
	言語系中国語・中国文化短期留学(吉林大学)	2018.9.10~9.21	5	6	11	0	11
	医歯薬学系・先端医療応用コース(成均館大学校)	2018.9.13~9.17	1	5	6	0	6
	自然科学系ワークショップ(吉林大学)	2018.10.11~10.18	1	4	0	5	5
	自然科学系研究室留学(成均館大学校)	2018.10.10~12.12	1	0	0	1	1
	自然科学系ワークショップ(成均館大学校)	2018.10.24~11.1	4	0	0	4	4
	人文・社会学系ワークショップ(吉林大学)	2018.11.7~11.9	3	1	2	2	4
Korean Studies Lab Exchange Program(成均館大学校)	2019.2.11~2.15	0	5	5	0	5	
	小計		18	47	50	15	65
令和元年度 (2019年度)	長期交換留学(吉林大学)	2019.3~2020.1	3	3	6	0	6
	長期交換留学(成均館大学校)	2019.3~2020.2	1	7	7	1	8
	言語系韓国語・韓国文化短期留学(成均館大学校)	2019.8.11~8.23	1	11	12	0	12
	人文・社会学系ワークショップ(吉林大学)	2019.8.29~9.5	8	12	19	1	20
	言語系中国語・中国文化短期留学(吉林大学)	2019.9.9~9.21	4	3	7	0	7
	医歯薬学系・先端医療応用コース(成均館大学校)	2019.9.19~9.23	0	4	4	0	4
	自然科学系ワークショップ(吉林大学)	2019.10.16~10.23	2	3	0	5	5
	(中止※1)自然科学系ワークショップ(成均館大学校)	2020.2.15~2.22	0	0	0	0	0
		小計		19	43	55	7
令和2年度 (2020年度)	COVID-19世界的感染拡大により令和2年度派遣プログラム実施計画全面中止		0	0	0	0	0
	言語系韓国語・韓国文化短期留学(成均館大学校)※2	2020.2.15~2.26	1	12	13	0	13
		小計		1	12	13	0
	総計		70	174	209	35	244

*1 COVID-19感染拡大の影響により中止

*2 令和3年3月12日付文科省通知に基づき、基準を満たすオンライン交流を実績値に計上

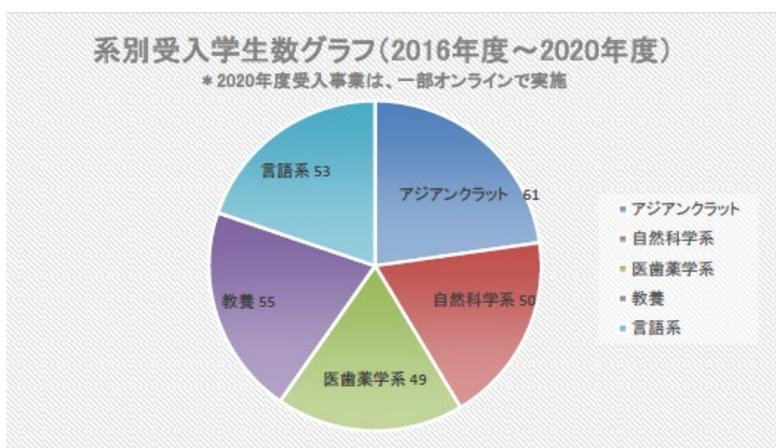


受入プログラム

年度	プログラム名	プログラム実施期間	所属大学		総計
			成均館大学校	吉林大学	
平成28年度 (2016年度)	長期交換留学	2016.10~2017.2	8	4	12
	CAスプリングスクール(日・中・韓合同ワークショップ)	2017.1.15~1.21	7	7	14
	言語系短期語学留学(成均館大学校)	2017.2.1~2.22	12	0	12
	歯医学系・先端医療応用コース(成均館大学校)	2017.2.6~2.16	9	0	9
	歯医学系・先端医療応用コース(吉林大学)	2017.3.7~3.11	0	4	4
	小計		36	15	51
平成29年度 (2017年度)	長期交換留学	2017.4~2018.2	7	9	16
	歯医学系(薬)先端医療応用コース(成均館大学校ダブルディグリー)	2018.1~2018.12	1	0	1
	歯医学系(医)先端医療応用コース(吉林大学基礎医学院)	2018.2~2018.12	0	1	1
	CAスプリングスクール(日・中・韓合同ワークショップ)	2018.1.21~1.30	8	7	15
	言語系短期語学留学(成均館大学校)	2018.1.29~2.16	12	0	12
	歯医学系・先端医療応用コース(成均館大学校)	2018.2.7~2.10	6	0	6
	自然科学系・ワークショップ(吉林大学)	2018.2.28~3.6	0	5	5
	小計		34	22	56
平成30年度 (2018年度)	長期交換留学	2018.4~2019.2	8	8	16
	歯医学系・先端医療応用コース(吉林大学基礎医学院)	2019.2~2020.1	0	4	4
	自然科学系・ワークショップ(成均館大学校)	2018.7.17~7-24	4	0	4
	歯医学系・先端医療応用コース(吉林大学)	2018.10.23~10.27	0	10	10
	歯医学系・先端医療応用コース(成均館大学校)	2019.1.15~1.22	6	0	6
	言語系短期語学留学(成均館大学校)	2019.2.8~2.21	15	0	15
	自然科学系・ワークショップ(吉林大学)	2019.2.27~3.7	0	10	10
	小計		33	32	65
令和元年度 (2019年度)	長期交換留学	2019.4~2020.2	8	9	17
	歯医学系(医)先端医療応用コース(吉林大学基礎医学院)	2019.10~2019.12	0	2	2
	自然科学系・ワークショップ(吉林大学)	2019.11.18~25	5	0	5
	CAアジアエリートワークショップ(吉林大学)	2019.11.19~20	0	11	11
	自然科学系・ワークショップ(吉林大学)	2019.12.2~12.4	0	26	26
	歯医学系・先端医療応用コース(成均館大学校)	2020.2.4~2.10	6	0	6
	(中止※1)歯医学系(医)先端医療応用コース(吉林大学基礎医学院)	2020.1~2020.12	0	0	0
	(中止※1)CA成均館大学校・吉林大学交流プログラム	2020.2.6~19(20)	0	0	0
	(中止※1)自然科学系・ワークショップ(吉林大学)	2020.2.26~3.4	0	0	0
	小計		19	48	67
令和2年度 (2020年度)	COVID-19世界的感染拡大により令和2年度受入プログラム実施航全面中止		0	0	0
	言語系・成均館大学校・吉林大学交流プログラム※2	2021.2.15~2.19	8	6	14
	2021年春CAオンラインパイロットコース(成均館大学校、吉林大学)※2	2021.2.15~3.29	3	12	15
	小計		11	18	29
	総計		133	135	268

*1 COVID-19感染拡大の影響により中止

*2 令和3年3月12日付文科省通知に基づき、基準を満たすオンライン交流を実績値に計上





CAMPUSAsia

Asiancrats: A Prime Professional Human Resource Development Program
for the East Asian Higher Education Area



OKAYAMA UNIVERSITY